

339

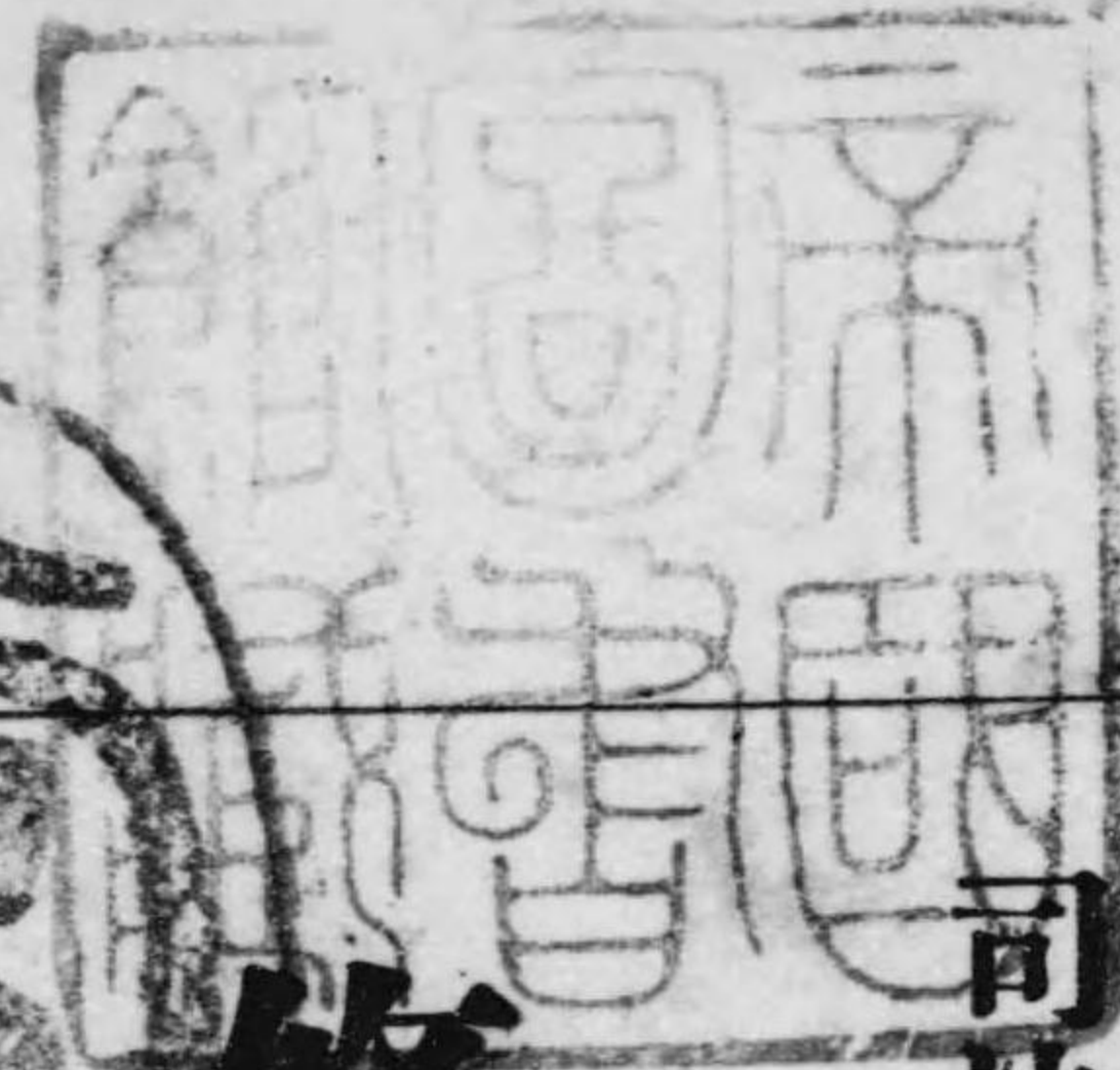
493



始



339-493



司法大臣尾崎行雄閣下序

修
養
鑑

大日本國民中學會編

大正
3. 9. 10
丙交

序

方今、汚俗風をなして、正義地に落つ、社會の中心を形成する所謂紳士の階級は滔々として是れ朽木也、糞土也。吾人の屬するところ當に青年ならざるを得ず。潑刺にして清鮮、未だ世俗の汚に染まざる青年は永久に吾人の伴たるに共に、亦永久に正義の伴たり。吾人に青年あり、自ら慰するところ唯これのみ。

而も、青年の意氣は修養を待つて始めて用ふ可し。青年は修

養の時也、修養によつて人格の根本を養ひ、以て他日の素を作らざる可からず。青年なる哉、而して修養なる哉。大日本國民中學會、「修養鑑」の一書を著して、青年の修養を説く。大に余が意に適ふ、乃ち敢て一言を序すこ云爾。

大正三年八月二十五日

尾崎行雄

修養鑑目次

目	次
緒言	一
第一章 修養の根本義	一一
第二章 唯誠の一字のみ	一九
第三章 修養と天分	二六
第四章 天分の助成運命論	三二
第五章 人格といふ事…容貌論	四一
第六章 子々の義	五一
第七章 向上精進	五七
第八章 社會の習慣に對する用意	五九
第九章 上品と下品	六五

第十章	肉體と精神	七一
第十一章	智情意	七九
第十二章	意思	八三
第十三章	意育と體育	八七
第十四章	意志の目的	九一
第十五章	克己酒色の戒め	九五
第十六章	小勇と大勇	一〇四
第十七章	勇の養成	一一三
第十八章	武勇と文勇	一二〇
第十九章	文勇の養成	一二六
第二十章	仁と愛	一三〇
第二十一章	感情の訓練	一三七

第二十二章	激情に就いて	一四三
第二十三章	正々堂々の道	一五〇
第二十四章	感情の調節	一五六
第二十五章	社交に就いて	一六八
第二十六章	智と徳	一七三
第二十七章	邪智と眞智	一八二
第二十八章	天賦と努力	一八七

修養鑑目次終

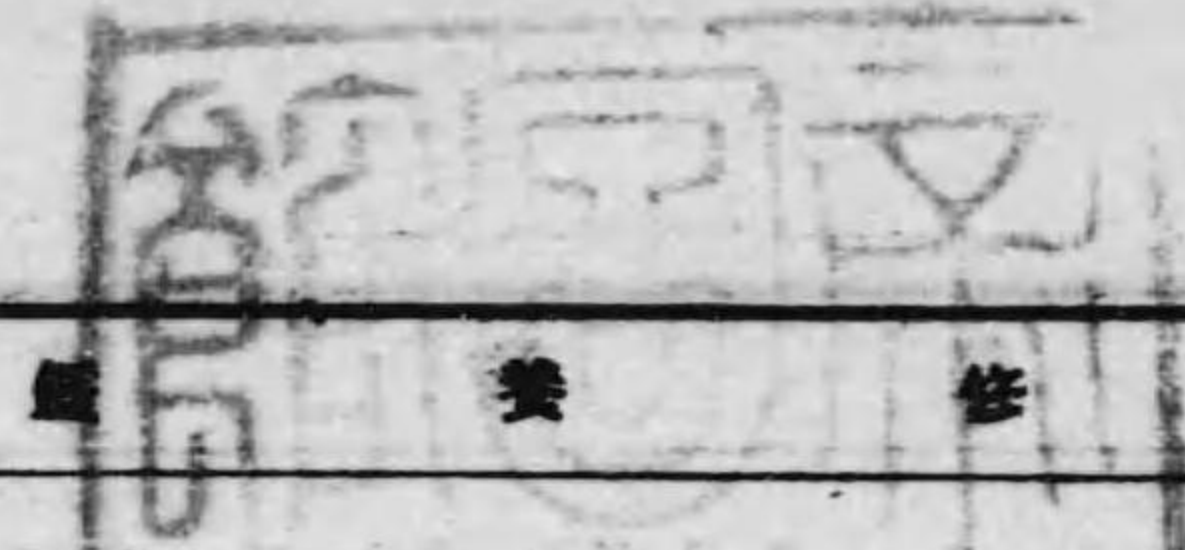
修養鑑

大日本國民中學會撰

緒言

自分はこの諸君の爲めに修養の一斑を説かうと思ふ。修養の本問題に入るに先立ち、二つ三つ云つて置き度い事がある。先づそれを説かう。

「君は何にならうと思ふか！」斯う諸君に問はれ、諸君は、或は軍人にならう或は學者にならう、或は商人に、或は官吏に、或は文士にと云ふ風に、各々その目的とする所を以て答ふるであらう。其の個々の目的こそ異なれ、要するに「傑れた人にならう。」といふ點では一致してゐるであらう。未だ明かに目的を定めぬ人でも、兎に角、傑れた人にならうといふ、漠とした、併し乍ら強烈な



希望を必らず有つてゐるであらう。

「傑れた人にならう、天下後世に謳はるゝやうな、人にならう！」

諸君の眼は常に青空の彼方を望み、諸君の心は遠い光明に憧れてゐる。その輝ける眼よ！その若々しい胸よ！斯した新らしい力に先ちた諸君であればこそ、自分がこゝで修養の話に口を酸くする甲斐もあらうと云ふものだ。諸君の内部分から溢れ出ようとする其の生命の力、此の力こそ尊い大切なものである。此の尊い大切な力は、決して濫費してはならぬ、又悪い方へ導いてはならぬ、その力を有益に費やすにはどうすれば宜いか、又どういふ方向に導けば宜か、それを説くのが此の一篇の目的で、修養といふのも即ち此の事に外ならない。

「傑れた人にならう！ えらくならう！」

諸君は皆斯う考へてゐる。斯う考へないやうな人間は駄目だ。所謂朽木彫る可からずで、もうはじめから見込は無い。諸君の中には決してこんなぐうたらは

居ないと確信するが、さて、その「傑れた」といふ意味、「えらい」といふ意味は、どういふ意味か。それを一應考へて見なければならぬ。此等の言葉はその意味が、甚だ漠としてゐて、種々に解釋される。真に「傑れた」とは、どういふ事であらう。真に「えらい」とは、どういふ事であらう。

一時「成功」といふ言葉が非常に流行して、所謂「成功熱」が、青年ばかりでなく、世間一般の人々を襲ひ、何事につけても成功々々と血眼になり、其の結果、随分如何はしい事やつて不義の富を積んだ某富豪などが一代の理想を代表する人物として渴仰され、所謂成金の輩が青年の模範なるかの如く崇拜された。何でも成功しさえすればえらいのだとせられ、成功せる人即ち傑れたる人と解釋された。今はその所謂「成功熱」はそれ程でも無くなつたが併し未だ斯うした考へ方がなかく、勢力を有してゐる。殊に青年の間には、依然として「成功熱」が流行してゐる。

勿論成功といふ事はよい事だ。或る事業を成し遂げるといふ事は立派な事に違ひ無いけれども、成功即ち傑れた事、成功者即ちえらい人といふやうな考へ方は非常に間違つてゐる。此の二つは全然別ものである。殊にその所謂成功は金を儲けるとか財産を殖やすとか、又自分の世間に於ての地位を高めるとか、さういふ類の成功であるに於ては、成功と、えらいといふ事との二者は全然別である。勿論成功もえらい事の一部分には違ひ無いが、成功即ちえらい事とはいへない。真にえらいといふ事は、成功とか不成功とかの上にあるのである。諸君は真に傑くならねばならぬ。成功しようが成功しまいがそんな事はどうでもよい、唯真に傑れた人になればそれでよいのだといふ意氣で進む可きである。諸君は決して成功の奴隷、成功の餓鬼になつてはならぬ。成功は末である、真にえらくなる事が本である。或る金儲けの上手な人に、金儲の秘訣を問うた處、金々と血眼になるから金が儲からぬのだ、金儲けをしようとするれば先づ金を離

れよ、金の囚れから脱れよと答へたさうだが、是れ實に至言である。ひとり金儲けのみならず總てに就いて成功せんとせば先づ成功から離れよ、成功といふ事を忘れよ。而して真に傑れた人となれ、さうすれば成功は求めずして來るであらう。

さらば真に傑くになるとはどういふ事か。是こそ此一篇に説かんとする處の主眼で、到底こゝで説き盡す事が出来ぬが、一口に云へば人間として立派な者になるといふ事である。軍人でもなければ、學者でもなく、商人でも無ければ官吏でも無い、唯一個の人間として先づ完全無缺な人、換言すれば人格の圓滿な人になるといふ事である。人格の圓滿な人となれば、何事を爲しても必ず成功する。桃李言はず自ら徑を成す。といふ文句があるが、全く其の通りで、美しい桃李の花は、花言はず人を呼ぶに非ざれど、その美しさに誘はれて人その下に集まり自ら徑を作るに至るが如く、人格さへ立派ならば、強いて成功を求

めずとも成功は自からにして至るのであつて、斯くして得たる成功こそ誠の成功である。然うで無い成功、即ち人格の根柢の無い成功は、砂の上に建てた樓閣と同じ事で、いつ崩れて了ふか判らない。「不義の富は浮べる雲の如し。」と古人は云つた、必ずしも不義ならずとも、人格に根ざさぬ成功は洵に浮雲の如きものである。そこをよく會得せねばならぬ。

「傑れた人にならう！ えらくならう。」

斯う諸君は叫ぶ。併しその「傑れた」とか「えらい」とか云ふ意味は、この人格的のものでなければならぬ。人格を閑却して、何の「傑れたる人」何の「えらい」ことぞ。自分はこの意味から、彼の淺薄なる「成功熱」を排斥する。勿論「成功」そのものを排斥するのではないが、徒に成功の末に憧れて、人格の根本を培ふを忘るゝが如き現代の風潮を排斥する。

實際一面から見れば、これが時代の風潮であるのかも知れぬが、どうも現今

の人には淺薄になつた。生存競争が盛になつて、生存に骨が折れる——碎いて云へば暮しが六かしくなつたのにも依るであらう。人々は皆、成功々々と眼前のせゝこましい事に血眼になつてゐる。それも大抵、金を儲けるとか、月給も餘計取るとか、物質上の小成功に齷齪してゐるので實に卑しいとも情無いとも云ひやうがない。人格の根柢を培うて、先づ人間として立派な者にならう。人格の圓滿な、真にえらい人とならうと志す者は尋ねても容易に無いといふ有様だ。其の人は身を修める爲に學問をしたか、今の人は學問すら金をとる爲にする、眼前の利益の爲にする。身を修めるといふやうな事は忘れ果て、唯成功成功と叫んでゐるのだ。何といふ誤まつたやり方であらう。

自分は先づ諸君の前に確と云つて置く。真に傑れた人になるとは、決して金持になることでもなければ、官位勳等などの高きに上る事でも無い。そんな事は抑も末だ。そんな事を對象にして進む前に、まづ人間として立派なものにな

れ人格の圓滿な人となれ！ 傑れた人になるといふ事、えらくなるといふ事は決して、成功などといふ物質的な事ではない。今の人は一體餘りに物質にのみ傾き過ぎてゐると思ふ。

而して、物質にのみ傾き過ぎてゐると共に今の人にはまた餘りに自分一身の事にのみかまけ過ぎてゐる。右を見ても左を見ても、皆自分！ 自分！ と叫んでゐる。これは勿論悪い事では無い、人は先づ自分を樹てなければならぬ、自分を樹てるといふ事が總ての根本である。けれどもそれが極端になつて、自分さへ樹てればそれで宜い、自分の生命は自分自身の爲にのみなるのだと考へるのは儘かに間違つた考へだ。唯自己にのみ吸々として、自分本位のみ振舞ふ

はいかに世の中が世智辛くなつた所爲とは云へ誠に淺ましい。昔の青年は國家とか天下とかを標準にして物を考へてゐた。乃公出てくんば養生を奈何。」といふやうなのが彼等の抱負で、勿論非常に空想的な分子も多か

つたけれど、兎に角國家の爲、天下の爲にと志してゐたのである。自分の一身を修養するのは、決して自分一身の爲にのみでは無い、天下國家の爲だ。即ち自分は天下國家の爲にえらくなければならぬのだと考へてゐた。さればこそいざと云ふ時には命をも投げ出せたので、此の大氣魄は今の青年には極めて乏しい。餘り空想に耽らぬ代りに小利口で小心で、唯一身の爲にのみこせ／＼としてゐる。學生時代には、こつ／＼と勉強して努めて先生の御氣に入やうにし、卒業試験席次の甲乙に、天下分目の合戦ほどに心を碎いて、某官立學校優等卒業とあつて月給の四五十圓も貰へば鬼の首でも取つたやう。精々上役の御機嫌を取つて月給を上げて貰ふ工夫に餘念無く、その細君でも貰つて小ぼけな家でも持ち、髯を蓄へたり髪を分けたりして安價な紳士となり濟まし、それで天下泰平と納り込むといふやうなのが、一般の青年の普通の行き方だ。何といふ情無い事であらうぞ。

佐久間象山は、一身の四海に繋るを自覺したと云つてゐる。この位の意氣粗が無くしてどうして眞の傑れたる人となり得ようぞ。諸君の一身は決して諸君の一個のものではない。諸君は決して自分丈を善くして止む可きでは無いのである。諸君の人格が直に國家天下に影響を及ぼすに至るやうにならねばならぬ。少なくとも諸君は、それを豫期して修養の途に上らねばならぬ。

眼前の小さな成功などに目を呉れてゐても駄目だ。飽迄も遠大な志を抱いて自分の人格を無限に大きくして行くの覺悟を以て進まねばならぬ。

「傑れた人にならう！ えらくならう！」

此の叫びをして空言に了らしむるな、眞に傑れた人になり、眞にえらくなる爲の修養——以下、稍精しく之を説いて見度いと思ふ。

第一章 修養の根本義

修養といふ言葉は多くの人に用ゐらるゝ言葉であるが、又極めて曖昧な言葉である。人によつて、其の用ゐる意味が違つて居る、されば、茲で修養とは何ぞやといふ問にうまく答ふることは甚だ六かしい。先づ一通りに云へば、人が保つて居るあらゆる活動を、残す處なく、十分に發達せしめると云ふ意味に違ひはないけれども、さて何の様になつたのが、誠に發達したのであるか、どういふやうに發達せしむるのであるか、何を目的に、其發達の方向を定めしむるのであるか、問ひつめて見れば見る程甚だむづかしい。元來、人には様々の働きが備つて居る、その働きは自ら大きくなり盛にならんとする傾向をもつて居る。他人が種々とひねくつて、其の働きを直さうとするのは、或は誤りで寧ろ様々の働きそれ自らが、自ら、伸んとするやうに、のばす方がためになるので

は無からうかといふやうな疑も起る。何れにもせよ。修養といふ事は、極めて不明瞭なる名目である。人間の目的が何であるか、人は何の爲めに何をしようとして、此の世に生れ出でたものであるかといふ事が判らぬのと同じく、人間の修養といふ事にも、定つた意義が無いのである。字義からいへば、修め養ふのである。亂れんとするを修め、伸びざる所を養ふのである。けれども、人々によりて、其の修め方養ひ方が違ふのである。否、是が亂れて居る、是が足らないと思ふ事も、人によつて、其の判定を異にして居るのである。

修養といふ事は、先づ右の通り分らぬ事だ。それ故、もし成し得るならば、ここに生れた儘の人間に、少しも、他人の力を加へずして、全く自然の儘に、伸びさせたならば、或は、甚だ立派な人間が出来るかも知れないが、人間は何とか修養せられねば、或は自ら修養せずには、暮されぬやうに、出来て居る、人間が日々月々に暮して行くにつけて、自ら時々刻々に様々の経験をするので

ある、前に己が考へた事の誤りを知るもあれば、思ひも及ばなかつた成功を見る事もあり、何かにつけて、自らが、自らの生活境遇について、様々に判断し、様々に識別し、この悪しき結果は前にあの様なまづい考を以て、試みしが故だ。この好き成功は、前にあの様な計畫を以て當つたが爲めに得られたのだ。それで、將來は、是非斯いふ風に、仕なければならぬ、あの様にすれば、損があるに違ひないからといふやうに、自らの實地経験によつて、一條の方針が、ちやんと定つて了ふ。その方針が、やがて、自己修養の方針となつて、夫れによつて、自らを、之に適合せしめんと修養するのみならず、機會あらば、他人をも自分同様に修養せしめんと思ふ。而して其修養方針は、日月重なり、實地経験見聞知識の増加するに従つて、益々改良補綴せられて、愈々大丈夫に堅固不動のものとなるのだ、それで、同じく、修養といつても、人々によつて、其の方法が違つて居る、方法が違つて居るといふ事は、その意味が違つて居るといふ

事である。それが違つてをるのが、寧ろあたりまで、同じだといふのは寧ろ
虚である。人々の修養につけて、實驗した話を讀んで、それをやつて見ても、
面白い結果を得ない事が多い、或は、又、英雄豪傑の修養に關する戒などを見
ても、如何にも、簡單で本意ない様に思はるゝのが多い。なに。之位ならば自
分でも、始終やつて居る、或は、今やつて居なくても、やらうと思へば、何時
でもやれると思はれるのが多い、所が一寸、一度や二度は、その通りに真似が
出来るが、それを、一生續ける事が六かしい、たとへば高山彦九郎が運動の爲
めに、夜竹刀を千回振つたといふ話を聞いて試して見るのに、十日半月とは續
くが、扱物の半年と、それを續かす事は、先づ通常人にては六かしい。新井白
石が、毎晩字を千字宛書き果てなければ、決して寢床に入らなかつたといふや
な事を聞いて、自分も、やつて見ようと思つても、同様である。よし萬が一、
それが古の英雄 古の俊才の跡に倣つて、その跡通りにやつた處で、古英雄古

俊才が、それに依つて得た効果と同様の効果を真似をした己に得るといふ事は
六かしい。つまり自ら工夫し自ら發明して、その方法を試みて見たのと、唯そ
れを真似たのとは、同じくそれを試みたとするも、試みやうが違ふ。自ら工夫
し、自ら發明した人は、それに、満腔の熱血精神も籠めてあるし、種々の考も
凝らして居るが、真似をした人は、寧ろその仕様が器械的である、寫字生が字
を寫すやうに或は通常人が道を歩くやうに工夫も無く思慮も無くやつて居る、
是が其の結果の上には大なる違がある所以だ。劍術の型式といふものは、昔の
達人名士が、畢生の熱心を籠めて、工夫發明した結果だ、幾度か是を實地真劍
の勝負に用ゐて鍛練もし經驗もした結果だ、處がそれが型式として残つて居る
處を見ては、唯刀を上げて打つ計で、別にそれによつて傑い工夫とか發明とか
が籠つて居るのを論り得ない。例へば世に持て囃される名畫には、畫家の幾多
の苦心が含まれて居るが唯出來上つた畫として、是を見る時は立派だといふ計

りて、其苦心は判らぬやうなものである。修養といふ事は、其苦心、其工夫、其發明によつて自得せらるるので、出来上つた型式が修養を形作るのではない。その書を書いたといふ事によつて、何もその書家は、技倆を修め得たのではない。その型式を拵へたといふ事が、何も其の劍術家をして達人たらしめた、譯ではない。工夫をする時の意氣込み。苦心を経過した時の精神状態如何が實に其原因をなしたのである。かういふやうな處から見ると、修養の奥義は、全く人の自得にあつて決して真似て得らるゝ事ではない、大凡奥義といふやうなもの、所謂言ひて言ひ盡す能はず、聞いて聞き盡く能はざるもので、いくら、口づから詳しく説明を聞いた處で、本意の分るものではないのだ。恰も疊の上で、いくら水練の講釋をきいても、少しも泳げないのと同様である。況んやその修養に關する工夫が、文字に書表はしてあつたからといつても、本意のわかる筈はない、言葉で云ひ盡す事の出来ない奥のところを文字もて寫し得べき道

理はないからだ、修養の奥底は、矢張、昔の傑い人が、華を拵つて互に微笑點頭したといふやうな具合で、寧ろ、以心傳心の間に傳はるものだ。昔の劍術の師範が、弟子の技倆を試みるのはこの以心傳心で、つまり、師範自ら心の底に潜めてゐる所謂口言ふ能はざる奥の手がよく不言の間にその弟子によつて諒解せられたか否かを見たものだ。武術ばかりではない、文字を解するのでも、問題を解釋するのでも同様である。師が「一隅を上ぐるに應じて、弟子が三隅を解す」だけの實力が無くては、所謂師の意中が分る筈はないのである、換言すれば師の苦心慘澹せし時の心状と同様なる心状を、弟子が有つにあらざれば、師の言葉と説明をきいても一知半解に終るのである。詮する所、修養といふ事は、決して人の事を真似して出来るものではない。それは、己の信する人に就て、話を聞くもよし、又、其人の起居動作を見て學ぶもよし、或は傳記評論書籍を、讀めるだけ、讀むも可いが、兎まれ角まれ、自分の修養といふ事は、

いくら傑い人の話を聞いたからとて書物を多く讀ばとて出来るものではない。
「論語よみの論語知らず」といふのも、要するに自らの工夫、自らの發明、自らの創意によつて、自ら結果を作爲するといふのが修養の本義だ。まねた事は丁度一夜造りに建てた紙細工の城のやうなもので、一度風雨があると、すぐに剥げる、處が、方今は、何れの方面に於ても、此物まね主義が、最も隆盛を極めて居るので、一寸金箔を塗つて早細工に、其場、其日を胡麻化すといふやうな風が、實に甚しく行はれて居る。是は悪い意味のハイカラともいふべきもので、將來多望の士は、最も多く茲に心を注がなければならぬ。

第二章 唯誠の一字のみ

さて、修養して行くについて、貴賤貧富の如何を問はず、どんな人でも、一般に心得て行くべき事と、身分職業柄などのちがひによつて、それ相應に、特別に、心得て行くべき事とがある。

一般に、心得て行くべき事は第一は誠といふことである。昔から、誠は天道なりと、説かれてある通り、人間が、此世の中に暮して行くには、どうしても、是でなければ、立ち行かぬ。昔から、人々により、或は、宗教學說の相異によつて、様々の方法を用ゐて修養をしたが、何れの代、如何なる人とても、つまる所其目的は誠といふ一つの光を得んとするに、外ならぬ、斷食をしたとか、難行苦行をしたとかいふのは、何もその難行苦行といふ事に價があるのでは無くそれによつて得らるゝ誠といふ光が難有いのである。その難行苦行など

が悪い目的を以て、行はれたとすれば、たゞ笑ふべきのみではなく、むしろ、大に、恐るべき事だ。よく昔の物語にも、親の仇を打たんが爲に、火物、鹽物を斷つとか、己が一つの技術を得んが爲——例へば、刀劍鍛錬の手際を得んがため、或は書畫道の奥義を得んが爲に、常人の及ぶ能はざる苦勞をいたさかいふ話もあるが、又人を怨むが爲、人に害を與へんとて、色々工夫をし、苦心慘澹した話もある。これらの二つを比べて見るのに、同じく、苦勞をするには違ないが、その心懸や、誠に雲泥の差といふべしである。そこで、第一に、我等が、心すべきは、先、我心の潔白といふ事だ。仰ぎては、天に恥ぢず、俯しては、地に恥ぢずといふ心懸だ。昔、孟子といふ支那の賢者が曾子といふえらい君子を讃めた言葉に、布を幾度も河の水にて洗ひ、それを、照り輝ける、夏の土用の日ざらしにしておけば、眞白に晒される、かくして、出来上つた晒布は實に、白い布である。けれども、まだそれを以てしても、之を曾子の心中の潔

白なるに比ぶる時は、逆も及ばないといはれた語がある。我々が、第一に旨とすべきは、其雪白の布にも勝る可き清淨潔白の心を得ようとする事である。世の中に偽君子といふ言葉がある。表面ばかり君子のやうな顔をしながら、丁度金箔附きの重の内に、馬糞を詰めたやうに、腹綿の腐り果て、居る者を、罵つた言葉だ。支那の聖人孔子が、徳の賊なりと戒められた卿愿といふのも、同じ意味で、表面ばかり、正直さうに見え乍ら、その實は、多くの人を胡麻化す曲者を誹つたものである。或は、又笑ふ腹に劍ありとか、口は蜜にして腹には劍ありといふやうな寓言もある、之等は、皆、心の潔白といふ事を忘れて、外面許りを誠らしう見せようとする悪者を戒めた言葉だ。處が、此の心といふものは、外に見えぬ故他人の正直さうに見えて居るのを見ながら、それが眞正直であるか、或は外面ばかりであるかといふ事を見分けることが、甚だ六かしい。昔支那に王莽といふ人

があつたがその人初は實に勤勉率直で、よく人に謙り、よく自らの我慾を戒め萬事國のために天子の爲めにといふやうに振舞つてゐたので、朝野舉て、皆是を褒め讃へ、げにも、君子なりといふ評判が高かつたが、扱て次第に、日がたち、月が進み、其人の與黨が、漸く數多くなり、その人に心を屬するものが、漸く加はつた曉は如何であつたかといへば、とうく、自分に御恩のある天子様を位より下し、自分がそれに代つて、天子と僭稱し、萬事萬規を、我儘氣儘に、とり行つたといふ話がある。そこで後の人が嘲つて歌をよみ、王莽は晩年に彼様な悪事を行つたによつて、彼は逆賊なりとか、何とか、やかましく、批評せらるゝが、もし、彼が、恭謙信實の人柄のやうに見せかけ、朝野に人望を博して居つたその時に、一朝、病に臥して死んで了つたものならば、それこそ彼の眞實惡心は、外に見はれずして、矢張君子といふ芳名を、萬世に留めたであらうといふ意味の事をいつたが、實に道理至極な評と思ふ。又すつと昔支那

の周公といふ人は、大聖人といはれて居る人で、孔子孟子などといふ傑い人迄が、何でも周公周公というて尊んだといふ程の人であるが、若い時には、天子様の一族である土地の大名となつて居つた方と、心を合せて、叛逆をしようといふ惡計を抱いて居るといふ評判がたち、時の天子様からもその家來共からも大へんに疑はれたところ次第に年のたつにつれて、自分の身を殺して迄も、天子様の御爲に盡したいと思ひ、天子様の御病氣御平癒を天に祈つたといふやうな事實が判つたので、さきとその心底を疑うた人々迄も、皆後悔したといふ話がある、そこでまた詩人が、周公をして様々悪く流言せられた日に死せしめば惡逆無道といふ醜名を萬世に留めたであらうといふやうな意味の歌を作つた事があつた。さういふやうなもので、實際心の中の正直不正直といふ事は、却々判りにくい。そこで、その外面に惑はされずして奥の底迄見透すといふのが、所謂人を見るの明なので、人を使ふ上に於ても、人に使はるゝ上に於ても、實

際この事は極めて必用なものであるが、さて却々むづかしいもので、餘程の英
物といはれた人でも、人を見損つて、つい外面にだまされ心術の賤しき人を友
とし家來とし、爲に一生を誤つたといふ話も尠なくない

人の心の奥を見るのはもとより六かしいことであるが、夫れは茲で云ふべき
本問題でないから姑く措いて、さて、自分が修養して行く上について云はんに
實際始め心を清淨に持つといふ事は甚だむづかしい。六かしいからこの所を
説いた教に、大凡二つの分ちがある。第一は誠といふことは、生れながらの本
心に宿つてあるものだが、生れてから後様々の我欲に妨げらるゝによりその本
性を損ひ悪念悪事が出來るといふ風に説き、第二は別に生れつきにさういふ
誠といふやうなよい心を持つて居るといふ事は無いが併だん／＼と人間が暮し
て種々の事を見聞して行く中に自らは誠の道を以て生活しなければならぬと
いふ心掛が起つて來るといふやうに説いてゐる。東洋の方では昔から人の性は

善なりとか悪なりとかいふ議論がやかましい。生れつきによい芽を持つて居る
から夫を培はねばならぬ、培はなければ枯れて了ふといふやうに考へた人もあ
れば、又人は本來玉のやうな麗質を以て生れ出でたものだが、生れてからの習
がよくないので、偏癖邪惡も生ずるやうになつて來るといふ人もある。或人は
又善い性と悪い性と二つが初からあるといふやうに考へて居る。西洋でも生
れつきに良心が備つて居て、それが道德の原となるといふやうに説いた人もあ
れば何も生れつきにそんなものがあるのではない生れてから後の習によつて、
それが出來るのであるといふやうに説いたのもあり、説きやうは大分に違ふが
東西洋とも此様な相似た考へが種々と、説かれてゐる。併今は茲にそのやうな
事のむづかしい議論は云はない。唯併し、そのやうな議論は、古來無數の賢者
によりて説かれた事故、諸子も聞を得たならば、そゝいふやうなことの書いて
ある。書物を読み給へ。

第三章 修養と天分

若し生れつき人の善悪大小勇怯が、皆定まつてゐるものならば別に修養する必要もない又修養したとて悪い生れのもの悪人より外にはなれない。善い人は悪くならうとしてもなれない。さうすれば善なりとて別に賞むべき價もなく悪なればとて、別に罪することも出来ない。悪いものは悪くならなければならぬやうに生れたのであるから、生れ方が悪いので、本人に罪はない、それを道徳上の罪人として見るのは随分氣の毒のやうに思はるゝ。それで極端な論者には随分さういふやうな議論をして居る人もあるが、私は其様な事は無いと思ふ。それは人間の體と同じ事でこの體でも、勿論生れつきに於て強い弱いがある。が養生の如何によつて、強い者でも弱くなれば、弱い者でも随分強くなる。背の低い人が大へんに高くなるとか、足の短い人が長くなるとかいふ事は

勿論出来ないが、兎も角、飲食起居運動等の如何によりて、身體全部の事狀が大へんに變つて来るのは事實だ。是を以て推しても、ひとり人の心の方のみが皆生れつきで出来るといふ事は決して出来ない。それは生れつきにも善悪はある、が養ひ方にも大に良否があるのである。田舎で生れた子供を都へ連れて来て、一年もおいておけば丸で性質が違つて了ふなどが何よりの證據だ。その如くにつまり人はその居る處の天と地と人と、さうして自分等が携つて居る仕事などの爲に變化せらるゝのだ。その變る方の側から見れば、所謂三日會はずんば刮目して之を見るべしで、誠に恐しいやうなものである。此の言葉は昔の人が以前は愚劣であつたのに俄に賢くなつたので或人が驚いて言つた事だが賢い者が愚になる方にも矢張同様に云へる。そこで我等は實際今日の事實と歴史の示せる所によつて、生れながらにして人の質が定つて居るなどといふ事はどうしても眞實とする事が出来ない。よく世間であの子は行末が恐しい盗み根性

があるなどといふ、或はたゞに根性が悪いといふやうな事をいふ、その所謂根性といふ言葉は生れつき持て生れた質、即ち親から生んで貰つた質といふ事だ、だから世間でも、通常悪事などの天性がある事を認めて居る事が多い。私も勿論、それは全く無いとはいはぬが。世間で、さういふて居る多くの根性は矢張生後の習慣見聞から出て来たものが多いに違ひないと思ふ。又、英雄は生れ乍らにして凡夫が努めたりとて及ぶべきに非ずといひ、天性英敏とか天資絶倫とかよくいふ、而して天性とか、天資とかは、人間の及ぶべからざる事だと云ふ。我等も矢張り有爲の大人物は其性質も、固より非凡のごとく思ふが、同時に又勉強修養の効大に力ありし事を疑はぬ。秀吉の幼時でも家康の幼時でも又武田信玄、上杉謙信遠くは源頼朝、源義経、菅公、空海といふやうな人の修業時代は如何であつたかといへば、皆非凡なる勉強をしたものである。近くは徳川時代の學者に見よ。林羅山でも、山崎闇齋でも伊藤仁齋でも、中江藤樹でも、新井

白石でも、大凡一人として大に努めざりし人があるか。夫等の人は非凡の資に加ふるに、又非凡の勉強と修養とを以てして成功したものだ。大體天才とか何とかいふて、夫程でも無い事を大へんに不思議さうにいひ、青年の英氣を挫く事が多い。支那人の文章は何時でも法螺が多い。法螺でないまでも兎に角盛な大きな形容が多い。千里の江流一日にして下るといふやうな具合でいくら早くても千里が一日とは虚だ。何でも大きくいふのが好きな上代々専制政治の續いた國柄とて官尊民卑の風盛に、少し朝廷にでも立つた人の事であると、時代の學者が皆誇張の筆を振つて之を賞揚して居る。少しく支那の歴史とか傳記とかを讀んで御覽なさい。英雄には子供の時から、ちやんと英雄たるべき資格が備つて居る、人相も備はり、天地の象も備はつて居る、人相の判断など殊に面白い。たとへば其の容貌などの描き方も西洋のは寫真的であるが、支那人の書き方はいつでも眼光炯々とか豐頰隆準とかいふやうな事に一定してゐる。これ一

つは英雄といふものを特別に普通の下民と分たうとした傾向が然らしめたので我國の歴史家も亦随分その真似をして形容を大きくし、何でも一角の事を成しとげ得た人は、生れつきから何處か特異の處があるやうに書いてゐる。吾々の今日の考からいへば生れつきに良い生れつきを持つて来て立派なる人物になつたとしても、それは何も其人の手柄でない、それよりも生れつきは平凡でも自分の腕一つで、大事をなし大功を成し遂げ得た人の方が何倍も傑いとおもふ、が昔の人はさうは考へなかつたのか、何でも英雄といはるゝ人は半分神様のやうに奉らうとした。丸で呱呱と生聲を上ぐるその時から、常人に異なる者の如く書きたてた。これが大變な誤りを後の青年に與ふるので、何でも青年は、生れが傑くなければ傑い者にはなれぬ、大事大功を成し遂ぐるは天稟によると考へ自暴自棄する者が多い。従つて彼は天才なり我の及ぶ處に非ずといふやうに初から匙を投げてかゝる意氣地なしが澤山出来るので、實に嘆はしい事である。

成程心の働きにも氣力にも、天稟はあるに違ひは無い。それは丁度生來身體に強い弱いがあるやうなものだ。眼の働でも耳鼻口の何れでも手足の働でも、心及び全體の働でも、總て人毎に生來多少違つてゐるのは事實である、昔の學者が三十にて骨髄が出来上がるが丁度其時には甲は龍となり、乙は猪となつて居る、生れた時は略同様のものを天から受けて來たのであるが心得やうが良いのと悪いのによつて向ふ所を異にし初めには机の前一分厘の差も終には千里の差を生ずるに至ると説いたが、實際其の通りで性は相近きなり習によりてそれが遠くなる孔子が申されたのも此處の事である。生れた儘の性質は多少異つても皆が同様に修養してゆくものならば略、同じやうに相應の人間となることが出来るのであらうのに、子供の時から的心得方が悪いのによつて、大變な悪い人間になつて了ふのである。

第四章 天分の助成運命論

我等はもとより天稟天才を無視する譯ではない。食物でも人々によつて好と不好とがある。工手技藝のやうな事でも生れつきの質の善悪によつて其功に非常な違ひがある。學問は勿論の事、近く例ふれば碁を打つ事でも、質の悪い人はいくら勉強しても或る程度迄しか上手にはなれない、といふ話をよくきく。剣術でも其の通りで質によつて修業の出来不出来の度が違ふ。いくら勉めても人によつて、こゝ迄しか上れぬといふ限りが定つて居るといふのも事實だ。それ故、人によつて重い物を持ち上る力の分量が違ふやうに、心の働き方にも同様に其分量が違ふ事と思ふ。だから天性非常な分量を受けて生れて来た者はもとより非常なる幸であるが、併し、能く考へなければならぬ事は、修養せざれば大きな分量を有つて生れても、直に夫を失つて了ふといふ事だ。強い身體でも

不養生をすれば弱くなると同じで、心の方でも修養が第二の天性を作るので、習慣は第二の天性なりと昔より云はれて居るのはこゝの道理である。加之たとへ己の天稟に限があるとしても、何處に限があるか、自分には分らない。分らない方が、楽しみがあるので、それが分れば何人も努力する張合がない。遂には死ぬる者だが、さて何時死ぬるか分らぬので、人は一生の間生きやう生きやうと考へて、仕事をするのと同じ通りである。「爲せば成る爲さねば成らぬ世の中を成らぬといふは爲さぬなりけり」といふ歌は實に此間の意味をいひ現はしたので、それ故人々によりて天分が違ふといふやうな事に人々が勉強し仕事をして行く上について、何も考へる必要はないのである。自分といふものを細に上げて置いて、さて人間でも動物でも其他あらゆる萬事萬物どもについて観察すれば、己の一つ一つについて天分が備つて居るやうに見える。大きくいへば猿には猿だけ牛には牛だけの天分があると共に、人には人だけの分があり、そ

のまた人々の間には人々の天分があるけれども自分と云ものに立返へり見よ、自分の天分の何れにありやは容易に判るものではない。人々が自分を信する間は、何事をしても出来ない事はない。天分に限り無いといふ自覚が十分に備つて居る。故に修養する上に就いては自分の天分を考ふる必要はないので、唯何でも自分の元氣を盛にし、十分に奮發するのが大切だ。我も人なり彼も人なりとは、古の賢人が申されたが洵に面白い事と思ふ。諸子は唯之丈の短い句でも始終機の側に書いて置いて、己の元氣を養つたら宜しからう。或は又千萬人と雖も、我往かんといふ、萬丈の意氣を吐いた句もある。この意氣込が至極大事である。假令天から貰うた器量がいくら大きにしても、自分が奮發しなければ益々小くなるし、また生來がいくら小くても、培養によつては大きくなることは萬物皆其通りで間違ひはない、植物の成長は種子萌芽のみに由るのでは無い。生長して行く上につけての培養によりて、大に違ふ事は誤の無い事實であるから

である。大きな才智とか伎倆とかを生來有つて居るといつても、それが唯生れた儘で直働くのではない。培養によりて大に働くと小に働くとこの事があるのであるから、注意しなければならぬ。

但し一方では汝の天分に安んぜよといふ事がある（彼の人は餘りに焦慮の癖がある。ごうかも些と落着いて安心して居るやうに爲るがよい。それには人々に天分といふものがあるから、それにて安心するがよいと説く人がよくある、併し、是は意味を取り損ふ時は、大變に人間社會に害毒を流す譯で取るに足らぬのである。動もすると情者の爲めに、良い口實を與ふるのである。なに、人間には天分がある。いくら勉強したとて天よりの分だけしか出来ない又勉強すとも天分丈は得らるゝといふ様な信仰の下に悠々緩々と衣食に耽り、一生懸命になりて、働いて居る人を罵倒して居る者がある。大へんな不意見ではないか。いくら天分があつても勉強せざれば其の天分が役に立たぬ事は、前の通り

である。加之天分といふものは自分に分るものでない。自分の天分は神より外に知るものはない事は、前にいつた通りだ。たゞ下にいふやうな場合に於てのみ、天分に安んぜよといふ教がよく生た意味を持つ。それは自分で十分に勉強し計畫し乍ら而も失敗を重ねたやうな場合に於てである。かゝる場合に於て大抵の人は、是はもう駄目だと思つて、非常に失望落膽し夫れから挫折してもう何にも仕事をする勇氣の無くなる人が多い。其の様な場合に於て汝の天分に安んぜよ。失望するな。斯くなるも運なり。己が出来た丈け盡して失敗せしは、天の許さざる所なりと思つて、そこで安心して、また再度の仕事を圖るがよい。併し、今一つ是とは全く相反對した側より、天分に安んぜよといふ事も出来る。それは、己の功成り業遂げ力が附きたるに増長した時である。少しの事が出来力が出来たのにつけ上り己程傑い者は無いやうに思ひ、人を見下すのみならず、己の權柄で以て人の分を横奪せんと企つる様な強慾非道な心も出来て来る。此

様な人は自分乍らの餓鬼道に陥つて居る者である。是等には是非己に立ち返りて分限のある處をよく考へしめ、分限以上の慾に就いて望を抱かぬやうに心を用ゐしめなければならぬ。

併し茲の處は實際に臨むと悟る事が甚だ六かしい。失敗して失望落膽する時天分に安んずるといふやうな事は自分が出来なくても大抵かういふものだらうと了解する事は容易いが、さて分限以上の我慾を絶つといふ方は最も解り悪くして六かしい。一方では何でも仕事が出来た丈けやるがよいといひ、一方では程よい所で思ひ止れ、汝の慾を捨てよといふ。其の處が中々に解り悪い。まして慾といふ言葉を使へば、文字の上では明に悪い文字であるから、そんなのは捨てなければならぬといはれるが、實際自分が事を行ふ段になると慾と望との區別が立たない。否全く區別が解らない。其故何でも是はと思つて、一生懸命に仕事をして居る事が、傍から見ると、餘りやり過ぎのやうに思はるゝ事が多

い。凡そ人間一生の事は、萬事が此様な有様で爲さねばならぬ事でも、爲す時は不徳に陥る事が多い。其の間の中庸を得るのが第一六かしい。初から失敗も不徳もなしに爲す事毎、一として程よき所を得ざるはなしといふのに、甚六かしい。要するに人に損害を與へず、人の品位を損はざる限りに於て、己の品位を保ち、己の立つ所を保たんと心懸くるのが第一だ。

昔から説かれた様々の教にも、こゝは様々に説かれて居るやうだ。(1)或人によると成るべく自己に彼様にしたい、此様にありたいといふ望が起れば、出来得らるゝだけ、夫れを満足せしめ、出来得る丈け仕事をせよ。左様に心懸けて居る時は、人も矢張り其の様に心懸て働く結果、自ら我と彼とが觸合つて相互に交り、相互に共同して仕事し、遂には分業して互に爲に爲るやうになつて来る。人間の樂しみは食ふにもあらず、飲むにも非ず遊ぶにも非ず、唯だ仕事をするといふ事の上存するので、仕事をするといふ事が、即ち生くるとい

ふことの眞意義、仕事をするといふことに神は宿るものである。やるべし、やるべし、何でもどしどしやるべし。昔の賢者にも正道と權道とあり、たゞ規則づくめに杓子定規によりて、彼を爲しては正しからず、此を爲しては不徳なりといふやうな風に、身自らを搦め終らんは愚の至りなり。正といひ義といふも畢竟は人間相互に程よく暮して行くといふ事の外に理由はない、我と人とは都合のよい事が、正なり義なれば、今日の都合と明日の都合とに定りなき世の中に、一定不變の正とか義とかがある筈のものに非ず。萬事は唯、その時の常識に訴へ、出来るだけ當り觸りの無いやうに、出来る丈け仕事をせよと説いた教もある。(2)或は又一方では、嚴然として之に反し、仕事といふ事に何も價はない。仕事をすると即ち神聖なりなどいふは、妄言の甚しきものなり。いくら仕事をしたらばとて、正しからねば、世の中の害毒となるのみだ。害毒となる仕事ならば寧ろ仕ない方がよい、正と義といふ事は永久動かす可からざる大原則で

之れを破る者は、人間界の穀つぶしであるから、萬事はこれを定規として仕事を
をして行かねばならぬといふ教がある。(3)或は未だ人々に對して、天運天命と
いふものが初めから定つて居るから、いくら腕いても出来ぬ事は出来ぬ。又別
段に焦慮らすとも、出来る事は出来る。世の中の人には始終自分の慾の火に責め
られて、彼をしよう、此れをしよう、あせつて苦んで居る。此の様な人は己
の天分を辨へぬ人で、憐むべしといふやうに説く教もある。以上の三つの教は
互に反對して居つて、而して、各一面の眞理が其中にある。どうかすると、成
るべく仕事を避けるやうといふ癖のある人には、第一の教を奉ずるのが樂
だ。かけ構ひなしに仕事をするといふ風の人、働き過ぎるといふ風の人には第二の
教を心すべく、望が大き過ぎ慾が深過ぎる人には第三の教が効がある、何れの
教も皆或る一面の人間の悪い癖を直さんが爲めに起つたのだ。而して各人
は皆幾分か此の缺點の中の何れかを存して居るのであるから、人々は、能く第

一に自らの癖を知る事を努めて、その藥となる教を求めねばならぬ。夫れにつ
けても、人の癖は見易いが、自分の癖は、中々解らぬもの故、第一に良き師を
求める事が肝腎である。師は必ずしも讀書の師、學校の師を云ふのではない。
三人寄れば文珠の智慧といふやうなもので、傍目八目といふ喩の如く、他人か
ら見れば、案外自分の缺點はよく見ゆるものだ。何でも、自分に親切に能く忠
告して呉れる人の己に就ての批評を聞くといふ事が肝要である。

第五章 人格といふ事—容貌論

さういふ人が己の性癖傾向に就いて下す批評を集めて、夫れで、己自ら、己
の性格を、一つ己の頭の中にはつきりと書き出す事。鏡といふ物は、所有己以
外の萬物は隠す所なく、寫し出すが、鏡其れ自らは自分の影を見得ぬと同じく、
我自らも自分の像を畫く事は出来ぬ。自分の容貌風采の方は夫れでも未だ鏡と

か寫眞によつて之れを見能ふかとその性格習慣は、少しも自ら檢知するを得ない。自分の聲色が如何であるか。音調が如何であるか。言葉のアクセントが如何な具合であるか。是等は皆自分の口より出づるや否や直ちに自分の耳に入るものだが、扱て自分の耳にて其の調子が、善いか悪いか。聲色が美しいか否かといふ事は知り得ない、夫で上手だと人から賞られでもすると得意になつて歌等を歌つて居る。己惚といふ事は何れの方面にも有り勝ちだ。併し、容貌のやうなものは鏡を見ぬ中こそ、どうかすると己惚るゝこともあれ、目の前に影を宿す鏡に向つては、いくら慾目に見ても、痘の顔は笑窪と見かへる事は出来ない。それが聲音となると寫して見る事が出来ないものであるから、己惚るゝ者が甚だ多い。併し乍ら、未だ聲音などは、蓄音機の様なものが発達すれば矢張是に由りて、己自ら己の缺點を知り、それを直すことが出来るかも知れない。否其様な事を仕なくても、音樂の先生があつて、發聲の調子等を直して

貰はうと思へば何時でも直して貰へる。ひとり己の性癖に至つては、其の様に容易く、己の缺點を見分ける事が出来ないで、常に師友の助けを借らねばならぬ。而して自分の缺點のある所を知ると共に、よく前にいうた所の教を斟酌し夫れに由つて己の仕事の仕方を定めなければならぬ。人間の上品下品とはどういふ事かは、云ひ表はずに最も六かしい事、併しながら之れは、畢竟修養の目的、理想となつて居る事であるから、是非茲に一言しなくてはならぬ。人が修養して、誠實な人間にならう、清淨潔白な人間にならうといふ意味も、つまり上品なる人間にならうといふ意味である。さて上品といふ事は如何なる意義を持つて居るか。先づ容貌風采の秀美なる事が第一の條件だ。試に英雄とか大人物とかの傳記を読んで見よ。大抵其の人相風采が眼光炯々たりとか、鼻筋が通つて居るとか、音聲が清くて谷川の流れの如しとか、聲大にして鐘の如しとか、脊が高いとか低いとか、顔の色がどうとか、髭がど

うとか、全體に於て麗しいとか、優しいとかいふ様な事が様々と書いてある。これは反面から見れば、其の時代の人々が上等な人相といふ事に就いて有して居つた考が表はれて居るので、今日の大人物に就いても同様に書きたいと思はるゝ節が多い。實際容貌風采といふものは、聲よりも心よりも、一番先に他人の前に暴露さるゝもので、他人がその人に對して一種の感情を引き起すその源の大部分を爲すことは争はれぬ。古の支那の書物（例へば莊子などに、肩が曲つたり、體が歪んで居たり、色々奇態な容貌風采をした人が大に時の主君とか或は他の人より信用せられ、愛重せられたとかいふ様な、語が書いてあるが、併し此の様な例は先々稀有の事だ。否、その古い書物でも、其の頃からして稀有な例であつたればこそ、特筆したのであらう。或は容貌のやうなものよりも心を修養する方を重く云はんがために、容貌は斯くの如く醜かつたなれど心の清かりし爲に、斯くぞありしといふ風に云ふたものであらう。實際例からいへ

ば、人相が悪かつた爲めに、災に陥つた人の方が多い。惡相とか險相とか、貧相とか、いふ様な事は人が大變に氣にする。織田信長の畫像は、何處にあつても頬骨秀で頬肉落ち、やゝ貧相にやゝ險相に見えて居るのに引替へ、家康の畫像は多く頬肉圓滿として福相である。それでこそ此の二雄の運命が彼の様であつたのだとなづかれる。兎も角も斯ういふ様な風に、昔から人相と運命との關係が細く説かれて居る。さう云ふ處から人相を見て、運命を卜ふ人なども澤山表はれて來て、その話が昔から今日迄傳はつて居る。英雄達人の多く其の幼き時に人相見がその相を見て感服したといふ様な事が書かれてある。古書にも支那の列子といふ人が、人相見に遇つてその妙術に感服し、己の先生の許へそれを連れて行つたなどいふ話がある。元來此の人相が運命に關するといふ様な考は、人の容貌風采は多く天與で、人力の得て左右する事の容易ならざるものなるが故に、それに於て良い物を具へ

たるは、天がその人に分ち呉れた事の大きなるを見得るし、それに於て悪しきものなれば、天がその人に少しの恵みしか垂れなかつたと云ふ事がわかると、考ふるに至つたのは、然もあるべきで、昔の人間程天とか神とかを痛切に考へ、此の人間の働きにでも、人間が自らする事にでも、總て皆神と結びつけて考へて居つたのであるから、何でも人間の容貌といふものは、運命の象徴であるとか考へたのである。運命といふと何か云ふに云はれぬ不思議が其處に籠つて居るやうに聞える、成る程考へて見れば、人間全體が餘程不思議なものに違ひない人が自ら自分で自由に出来る考へて居る事、物言ふ事でも、笑ふ事でも、總て皆反面から見れば、天が然かせしむるものであるに違ひないが、それは左様に不思議らしい考へなくつても、先づ一通り此の容貌といふもの、如何によつて、多く人々の間に交り、世の中に立つ間にいくら幸不幸があるか知れない。妙に人に厭がらるゝとか好かるゝとかいふ事がある。何とはなしに彼の人は善

い人であるとか、善くない人であるとか思はるゝ。夫れによつて一生の幸不幸に大影響を及ぼすのみならず、己に對する多くの人の好悪といふものは、以心傳心に直ぐと己に解る者で、自分が多くの人に好かるゝ容貌をもつて居ると思ふと何となく元氣がよいが、若しも人に悪まるるといふやうな事が、臍に解れば、何と無く氣が引けて、妙に人間が狭くなるものだ。此の人のするわざと自ら爲すわざと、丁度二つの方面から人間一生の幸不幸といふ上に非常なる影響を及ぼす、況んや人間の心の働き性質の傾きといふものと容貌風采とは非常に密接なる關係を有するものであるに於てをや。此の心と顔との關係如何に就いては随分反對の例も擧らぬ事はない。面は菩薩の如く心は夜叉の如しといふ言葉もあり、昔から綺麗な顔を有しながら險惡な心を有して居つた人があつた事や、醜い顔をもちながら、心は玉のやうな人があつた例も少くない。西洋の聖者ソクラテスは顔は醜い方であつたといふ話である。

斯く異例は随分あるが、併し、一概に云へば、心と容貌との一致して居る事は争はれぬ。今日心理学といふやうな學問が益々進むにつれて、愈々然ういふ方の道理が明かになつて来る。昔孟子といふ人は人を知らんと欲せば、先づその眸子を見よ。人焉んぞ度さんや、人焉んぞ度さんやといつた事がある。成程然うで人の總ての勢力は顔の中、殊に目の中に集る。同じ人間でも心の状態如何によりて、目の色が直ぐかはる。心が慌てゝをる時には目の色が落付いて居ない。又若しも目の病などに罹ると、其人全體が非常に元氣の無いやうに見える。併し何も目ばかりではない、顔全體外貌風采全體が矢張同様である。直様な心の状態を外に表はすものだが、併しその中に於て目程變化の微妙で變幻の極りないものはない。他の部分は然う俄に自由に變る事は出来ない、それ故先づ目が最初に心の有様氣分の具合を示すものと、昔からいはれて居るわけである。世の中には人相學もあり、骨相學といふ學問もあり、或は墨色判斷とか、手の

筋判斷とかいふ事がある。是等は唯目許りでは無い、身體全部と心全體とが親密に關係して居るもので、さてその心の善惡が其の人の吉凶禍福を作る大なる源であるといふ事を豫定して起つて居る事である。何も若い時から、左様なものに拘泥らつて、詰まらぬ事は役にも立たぬ心配をするには及ばぬが、併し唯それらの事が世の中に行はるゝ様になつたのは、何の理由もない、たゞ愚人を騙して金を貪る悪計といふのみでは無い、自らその中に一筋の道理がある、心美しき人なれば其の容貌風采も美しく、心正しき人なれば形も心も正しいといふ事は争はれぬ。心中にあれば色外に表はると、實にこゝの處を云つたのだ。昔の賢人が禮容とか威儀とかいふ事を力説したのも畢竟此の理由からである。人格といふ言葉は説明が六かしい。學問上の理窟を並べると更に餘り六かしい事になる、様々の方面から如何様にも説く事が出来る。併し通常世間で使はれて居る此の言葉の意味は畢竟心と形とが合體して、活動して居る全體を指

していうたものだ。其の二つの結び付いて動いて居る具合が如何にもよく整うて、正しい規則に叶つて居る時には、これを善き人格と名づけ、その結び付きが不調和で、その働き工合も亦不調和であると、それを悪い人格といふのである。否人格といふと、ごうかすると角が立つから、むしろ一層通俗な人柄なる言葉を用ゐるが宜しからう。諸子も御存じの通り、人柄といふ言葉の中には、その人の心の働きも、その人を外から見た様子をもすべて含んでゐる。心の方からいへば怒り易いやうな人であれば人柄がわるいといふ、外から見た様子の方からみれば眼附などが険しいと矢張人柄が悪いといふ。心柄が悪い、相が悪い、見えがわるい、つきが悪いなどといふやうに色々と言葉が使はるゝが、要するに、それ等は皆人柄が悪いといふ言葉の中に含まれて了ふ。そこでこれを自分に考へて注意し修養して行かうといふには、一方では出来るだけ細かに考へて、各部各事につきて別々に修養しなければならぬと同時に、他方では一

人の人間として、活動する全體の上に於て考へなければならぬ。人柄がよくないといふ事でもよく考へて見れば無限の意味を含んでゐる。柄は様子といふやうな意味である、心全體のやうすがよくないといふ事である。其の反面は即ち心柄がよい、氣立がよい、氣前がよいといふことで、心とか氣とかいふ中には所有すべてを含み、よしいい言葉の中にも悪くない總てを含んでゐる。道は近きであり、六かしく學問的にいひあらはした事よりも、却て此様な世間の言葉の方が巧く云ひ表はして居る。尙強ひて分ちて説明すれば、先づ心といふ時には心の静平なる時を云ひ表はし、氣といつたときは、心の流動せる時を云ひ表はして居る。此の心柄が良いといふ事は畢竟誠であるといふ事、氣前がよいといふ事は畢竟英氣とか、正氣とか、浩然の氣とかいふのと同じ事である。

第六章 子々の義

序に向一言云うておくが、浩然の氣とか正氣とかいふものは一人己を辱し
むる者あれば、劔を按じて疾視して立つといふやうな、ごつごつした氣前をい
ふものではない。昔の人も左様なのは小丈夫即ち器量の小さいものとする事だ
眞の大人物は何處とはなしに應鷹秦平なる中に冒すべからざる威嚴を具へたも
のだと云つてをる。古の聖人が、誠とか、義とか云つて教へておかれた事を、
後世のつまらぬ者共が十分に其の意味を曉り得ず、それ、これが義だ、これが
誠だ、彼れこそ不正だ、不義だ、己の信ずるところは正し、これに反するもの
は邪なり、いかにしても邪は正さざる可からずといふやうに考へ、切齒扼腕し
て、直ぐ人を攻撃し何でも己と考へを同じくせざるやうの人であれば、直ぐそ
れを奸とか邪とか名づけて、抑壓しようとする事が屢々ある。否、後世のみで
はない、昔から其の患が絶へなかつた。乃ち大道廢れて仁義あり仁義止まざれ
ば盜賊滅びずといつて、仁義仁義と、八釜しく説き廻る事の弊を戒めた人があ

る。孔子とか、孟子とかが仁とか義とかを説けば、よく解りもしないで仁とか
義とかを喋々し、四角四面に世の中を渡るやうな事を以て、道と考へて居つた
やうな事が澤山あつたので老子などが盛にこれを誹つた事は誰でも知つて居る
事だ、第一流の傑れた人は何と言はれても、其の言々句句に癖がない。孔子程
の聖人の其の言葉に癖があらう筈がないが、その末派になると、實に弊害が甚
しい。それ故支那でも戰國頃には、澤山俠士とか刺客とかいふやうな者が現れ
た。而して、力に任せ腕に任せて、人を抑へ人を殺さうとし、以て義理に従つ
て邪を攘ふのだと稱して居た。史記の列傳などにも随分その例が上つて居るか
ら閑の時繙いて見給へ、彼の名高い漢の張良でさへも初めはさういふやうな
ごつごつした人物であつたので、鐵椎を投じて博浪沙に秦の始皇を撃ち殺さん
としたのは有名な話だ。それが老人の靴を拾つた因縁よりして其老人に教へら
れ、修養を積み、後には謀を帷幄の中に廻らし、勝を千里の外に決すと云

はるゝやうな大人物となり得たのだ。さて、その様に自らを賢とし、他を不義なりとして、直ぐ是れを抑へんとするやうな間違つた小人物もが澤山出来たものであるから、本當に賢い人は、皆是れを戒めるに骨を折つた。或る賢い人が仁も義も無用有害のものだと喝破したのは、斯かる小人物によつて、徒に仁義が弄ばれたからである。又他の賢い人は、修養の極致に達した境を以て、丁度酒に酔うた時にたとへた。酒に酔うた時には、無我無心故、仆れても怪我をせぬが、覺めた時だといやに體が堅まつて居るから、非常に怪我をする。それで人間は酒を吞まざる時にも酒に酔うて陶然としてゐるやうなゆつたりとした心持で居ればどんな境遇に遭うても、何時でも、綽々として餘裕がある。人間修養の妙所は此所にありといつて居る。又或る書物に孔子が有名な水泳家に道をきいたといふ話を書いてある。流が激しくて、逆も並の人では叶はぬやうな急流を如何にも平氣に泳ぎ越したものがあつたのを孔子が見付けて「其術如何」

と問うと、其人は「何も別に術とてはない。たゞ、自然の儘に水の心の儘に我が身を任せてゐれば自ら浮いて来る」と答へたと云ふ。その自然無心といふ事に味がある。小人物は詰らぬ事に拘泥し、いや善だ悪だ正だ邪だといふやうに區別を附けようとするから角が立つて無理が出来る。そんな場合に躍起となつて腕立てをするのを孔子も小勇として戒めて居らるゝ、子路といふ弟子が、どうも、少しさういふ風であつたと見えて、殊に其の人を戒めて居られた。又血氣の勇とか、暴虎憑河の勇などといふ言葉もある。何れも子々たる小人物を戒めた言葉だ。所が我國人の氣風には大分この子々の風がある。山が險しく流が急な如くに人氣がどうものんびりとせぬ。清い所はあるであらうが、さて甚しく器が小さい。昔腰に刀をさして居つた頃は、すぐ引き抜いて勝負と出かけたのである。維新の際に於ける水戸の正黨奸黨の争などもその餘弊を承けて、幾多の骨と血とは皆其の犠牲に供せられた。今日でも下等社會に於ては、すぐ

乃物を振廻す。新聞雑誌の上に悪口をいふ、政派の争などでも學校騒動などでも、矢張皆昔の悪い血を受けついでをる。今日の青年たるものは尙々修養して、將來の大國民たるべき資格を備へなければならぬ。一寸蚊に刺された位で肩臂を怒して、睨み廻すやうでは、いかにも器量が小さくていけない。寧ろ臂が腐つても坐つた膝は石を離さぬといふ程無頓着であつて欲しい。

さて斯くの如く説き來ると誠に六かしくなつて來る、一方では己の正なり善なりとする處は飽迄も主張して、社會の爲めに是をすゝめなければならぬといふ。然るに又一方では今いふたとほり、始終ごろ／＼として正義呼はりをするやうな風を避けねばならぬ。そこで實際問題としては、この二つの方面をいかに調和す可きか、全く反對して居るやうで誠に困る、是れ實に、修養上至難の問題である。そこで昔から茲の所を中和しようとして誠の標準は中庸を得るにありと説かれた。極端をやれば何でも不誠實になる。程よいところが善なり

正なり、義なり、誠なりといふのである。所がその標準たる程よいといふ處がまた的のない事である。中庸を定むるには又別の的が必用だといふ事になる。さういふ風にいへば何時になつても確かな的が定らぬ。ここの所は實に六かしくて今茲で明に云ひ盡くす事が出來ないのである。

第七章 向上精進

否、此所に進めば人生は秘密の幕の中に入るので、寧ろ言はんと欲して言ふ能はずといふやうな、不可言の妙所といふやうな所に這入つてしまふ。これが中庸の標準である。誠と邪との標準であると示し得るやうな標準は、實に淺薄至極のもので、何の役にも立たぬ。そこで諸子が此の場合に處して行く可き道は、先づ時々刻々事に臨みて、己が正なり、善なりと思ふ處を行へ。併し其の時の己の判断が決して永久不磨の眞を得たるものなりと思ふべからずといふに

ある。己の見識が進めば、尙ほその缺點が見付かるべき事を豫想して行くといふ事だ。即ち一方では事に臨んで爲さねばならぬ事は、其時の判断通り、自信して行ふが、一方にてはその不十分なるを思へといふ事だ。換言すれば一方に自信を有すると共に一方には絶えず己の不足を思つて居れといふ事だ、其不足といふ自家謙遜の所から師につきて感化を受けようと思ふ氣も起れば、古聖賢英雄の傳記によつて、感化せらるる事も出来るのだ。又信仰の心を起して、清き正しき心を以て、神の教を奉せんといふ考も起るのである。そこで我自らを信する事は、人若くは人以上の神を信することと相待つて我を導く光明となるのである。我以上のものに對して信仰し、謙遜する事を知らざる人は、決して正しき意味に於ての自信といふ事は出来ない。世の中の暴虐と罪惡とは皆かやうの人の手によつて作らるるのだ。自ら謙抑するを知らずして徒らに揚々乎として自得せるもの、茲に心を致さねばならぬ。

形の方はつきがよい、様子がよい愛想がよいといふやうな言葉の中につくされて居る。容貌、風采、言語、坐作總て皆上品なるべしといふのが理想である。心と形との關係は前にいつた通りで、而して心柄の人間一生の禍福に影響する事の大なるが如く、容貌も亦非常にそれに影響する。笑ふ門には福來るなどといふのはこの所をよく云ひ表して居る。強ちに何も福を的として、己を修養しなくつてもよいが、併し不幸と云ふ事は決して閑却し得可きものではない。兎も角も、徳にも叶ひ福ともなるやうにするのがよいのである。

第八章 社會の習慣に對する用意

孔子の教には、文といふ事が強く説かれ、禮容威儀といふ事が重く説かれた。汝禮を學びたりや、汝詩を學びたりやと、孔子が自分の子に問うたといふ事も論語に見えて居る。否孔子のみならず、大體この周の時代の風として文物威儀

を整へるといふやうな考が流行して居た。それで支那の後世の學者達も多く是れに倣うて、細かに夫れを説明した人もある。宋時代の學者に至つて、殊に細かに是れを説くに至つた。起居舉動衣食住總て頭の上から足の尖まで規則づくめにつけた傾がある。丁度夫れが我國へも傳つて來て、徳川時代には大へんに行はれた。併し、餘り規則づくめになると、此無意味は形ばかりを作るといふことになつて宜しくない。精神のなくなつた道徳の死顔のやうになつて了ふ。そこでそれでは詰らぬといふので死骸を生かして活氣ある生活を爲ようといふ反動が起つて來る。時代からいつても、規則づくめの時代と、規則を打破した時代とが交替して居る。守成の時代は要するに規則づくめの時代であつて、何事でも型に倣めて行くが、改革時代は總て一氣に舊來の型を壊して了ひ、非常に自由になる。例へば徳川時代の中頃に於て將軍に仕へた大名がどれだけ細かな規則にくゝられたか、又大名に仕へた武士が麻上下を着てどれだけ窮屈に暮

して居つたか、これを戰國時代の武士、又幕末から明治初年へかけての志士の生活に較べて見るが宜い。畢竟此の兩面は人間社會の發達の上に相交錯してゐるので、一方が善くて、他方が悪いといふ事は無い。畢竟兩方とも自ら道理のある事故、己一人から云へば、先づよく己の生きて居る時代はごういふ時代であるかを見て、夫れに適應して行く事を考へねばならぬ。が適應といふ事にも又程度がある。改革時代の人から、守成時代の人を見ると頑固で因循で誠に愚かなやうに見えるが、守成の時代の人から改革時代の人を見ると又甚しく野鄙に見える。一人一人に就いても同様で、成るべく社會の型式に適應して行かうといふ人と、成るべく社會の型式から離れて、己一人の所信に従はんとする人がある。此の傾きを異にした兩様の人はいつても互に反き合ひ誹り合つて居るが、それはどちらにも極端でどちらの間違つて居る。大體としては禮儀作法辭令挨拶といふやうなものは、一人一人の事では無く、社會多人數の間に共通せら

る、一種の型式であつて、多年の歴史を經、多人數の經驗を經て發達して來たもので在る、ともかくも、皆是れに従はねばならぬのは當然だ。禮儀とか作法とかいふものは、決して自分一人の事では無い。若し、世の中に己一人しか居ないものならそんなものは要らぬが、世の中には、己と同様なる人格がいくつもあつて、己と夫等の人格との關係にも、或は上のものとか、下のものとか、同輩のものとかいふやうに様々ある。それらの様々なる人の様々なる關係を調和するのが、禮儀作法だ。畢竟禮儀作法といふものは我と他人との間に成立つて居るものだ、夫故自分一人でいくら夫等の禮儀作法などを不便に思つたからとて、自分一人の勝手にそれを改める事は出来ぬ。畢竟其の様なる人は無作法の者として排斥せらるゝやうになるのである。併し、又儀式や習慣にのみ拘泥して他を顧みぬといふやうでも不可ぬ。要するに先づ大體の原則としては、習慣といふものを重んじなければならぬが、さて一方ではその習慣の形の中に含

まれた意味を考へ習慣に就いて世の中の人々が何の様に解釋し、どの様に判斷して居るかを考へねばならぬ。能く其の時代の解釋と時代の要求とを知つて然る後にそれを改良して行くに努めねばならぬ。總て時代には、その時代の傾向と云ふものがある。その傾向を了解し、此次に來るべき時代はどういふものかといふ事を了解し、そこから今日の禮儀作法の或ものは益發達せしむべく、或るものはむしろ廢止すべしといふやうな風に結論を得て來なければならぬ。唯自分勝手に、是は舊弊である。是は弊習であるといつてそれを破らうとしても世間が許さぬ。それを無禮無作法の極みである。さういふ時は自分一人の考は後とし先づ世界全體の人がどういふ風にそれを考へて居るか、己の周圍の人はどういふ風の考を有つて居るかと考へ、己が生活して居る社會全體の考を酌みたる上で判斷しなければならぬ。唯舊を墨守するのみではいけない。改良する事を考へなければならぬのであるが、扱て改良といふ事は夫れが社會一般の聲

になつて來なければ出來るものではない。例へば、日本風の宴席で杯を交換するといふ習慣は、學問上の理窟から考へる、とどうしても不衛生であるが、さてこの習慣の起原には遠き歴史があつてつと昔から心からの友達が寄り合つて、真心を誓つた儀式の痕が残つて居るのである。血を啜りて誓つたやうな事實も戰國時代に多く見えて居る。夫程深い因縁あるものを、唯今日學問上から考へて不衛生の恐れがあればとて、一朝にして是を止めるといふ事が出來ぬのは當然だ。親みを結ぶといふ事を主として考へれば不衛生とか何とかいふ事は全く度外に置かねばならぬ。否それ處ではない、君の爲には一つより、外にはない命すら惜むに足らぬといふ程の心意氣を以て、交を結ぶに際しては不攝生だとか何とかいふやうな殺風景な理窟を容る、餘地はない。斯ういふやうな風に禮儀作法といふものには深い根柢があるもの故、是れが改良も決して苟めにするべきではない。

第九章 上品と下品

人に上品下品の區別をする、上品といふのは何處と無く全體の人柄が接するものをして尊敬せしむるやうに出來て居る様を云ふ。下品とは之に反する様を云ふ。さて品といふのは何であるかといふと、これは一口には説明し難い。先づ傘屋が文字をかけたのを見るに圓かるべき所に圓く角であるべき所は角に出來て、何處といつて悪い箇所もないが、文字全體に一向に奥床しい所がない。之に反して書家の字を見ると横へ歪んだのも平たいのも長いのもあるが全體の上に於て、一つの云ひ得ぬ氣韻が備つて居る。是れは何故か。此の比較を直ちに人間の上に移して見るとよい。人間が上品であるといへば、容貌風采言語動作全體を總じて、その上に表はれた有様であるが、さて其人の頭から足尖まで髪とか衣服とか歩行ぶり等が、いくら綺麗でも、上品といふ事は出來ぬ。上品

といふには是非全體の上において、一つの犯し難き威嚴を有つて居なければならぬ。例へば、木の上に攀ち上つて居る猫を木の下から犬がねらつて居るのを見るに、それが長い間であると、ついに猫は氣力を奪はれて木から落る例があるのである。別に犬の口が猫に届くのでは無いが犬の勢力が猫に迫つたのだ。即ち見るべからず、聞くべからざる間に不思議の勢力が存在して居るので、人でも斯うした勢力をより多く備へて居る者が外から見て上品と云はるゝのだ。いくら、頭を綺麗に撫で付け、綺麗な着物を着たからとて、夫れで其の人の品が備はる譯のものではない。人形でも繪像でも、いくら華麗に出来て居ても、生きた人間程勢力を感せしめぬやうに、同じ人間にも、また階段があつて乙から甲を見ればその人は何となしに床しく思はれ、丙から乙を見れば矢張同様に見えると同じやうなものだ。極く上品な人の傍へよれば多くの人は何となしに一種の感に打たるゝものである、かゝる感動を多く與ふることの出来る人程上

品な人といふ事が出来る。斯かる無限の勢力は何によつて出来るかといへば時刻々誠意正心にするより外にはないのである。むかしの言葉に心廣く體ゆたかなりと云つたのはこの意味であつて、中に識備つて、外に上品となつて表れたる様に云ひ表はしたのである。
多くの人は上品といふ事と華奢といふ事とを混同し、質朴といふ事と野鄙下品といふ事とを混同する傾きがある。華奢といふ事は單に外觀のみ綺麗にするといふ事で、何もそれが道徳上悪いといふ事ではない。また善いといふことでもない。場合によつては上品な人は綺麗に見ゆるかも知れぬが、それは華奢とは違ふ。華奢とは身體のために美服を纏ひ、顔面の爲めに化粧をするといふ様な事をいふのである。白木作りの神殿が塗込めよりも却つて貴く見える通り形の爲めに形を造るといふ事は、それによつて氣高いといふ様な感じを人に與ふるものではない、人を引き付けるやうな力を持つて居るものではない。寧ろ賤

しむべきやうな感じを引起さしむるのが通常だ。人よりも多くの資本と心身の
 勞苦を費して得た結果は、唯人の侮蔑を買ふのみとすれば實に馬鹿らしいでは
 無いか。又質朴といふ事は、其眞實の意義は、人に偽をいはぬ有りの儘を示す
 といふ事にあるので、一つだけしかないものを二つにも三つにも示す様な事を
 仕ないといふ意味だ。身分相應の事をする。力相應の事をやる、貧者が富者の
 眞似をせず、富者が貧者と同じ様な事をせずといふ事だ。虚榮心があつて元來
 己に無いものを有る様に見て貰ひたいといふのが多くの人の缺點で、それが爲
 めに華奢といふ事が起つて来る。それが質朴に反對した一面である。それと同
 様に、また野鄙とかいふ様な事が表はれて来る。これは矢張一種の虚榮心に驅
 れたもので華奢の反面である。例へば、新しい袴でも、態とそれを引き裂いて
 着るいふ様な風で、人からあの人は質朴な人だというて貰ひたい爲めにするの
 だ。今時はやるハイカラとか、パンカラとかいふ事は、此の兩面を云ひ表した

もので、兩方とも褒むべき事ではない。但し此等の言葉は様々に使はれて意味
 が定まつて居らぬ。又人々の考によつて左様迄ない事でも、ハイカラであるとか
 パンカラであるとかいつて冷かす事がある。甲が大變に風雅だといつて褒める
 のを、乙はハイカラであるといひ、乙が質朴だと思ふのを甲がパンカラだと笑
 ふなどの例は澤山ある。是は言葉の意味が人々によつて違ふのみならず、人々
 によつて考へが異ふからだ。換言すればハイカラとは時好流行を趁うて直ちに
 夫れに移るのでパンカラとは一向時流を顧みず我關せずとすまして居るのであ
 る。今時にもちよん鬚の御爺さんがある、そんなのは誰が見てもパンカラで、
 又横濱邊の商館などに出入する人の風采などを見るとどこに稍々氣障な
 所がある。そんなのがハイカラである。それで良くいへばハイカラは進歩主義
 で、パンカラは保守主義である。社會全體から見れば兩方共に必要であるが、
 さてその極端なものは、兩方共に、大の厄介物である。夫れならばその兩極の

中庸は何れに在るか。何を標準として是れを定めるかといふ問題になると中々六かしい。約して一言にいへば、ハイカラともバンカラともいはれない様に心掛くるが一番よいと思ふ。何か名が付けば、夫れ丈は最早缺點が出来て居る證據である。誹られれば無論の事、褒られても己に褒めらるゝ點が人にありくと見えるだけ夫れ丈缺點を含んで居るのだ、才子だと褒めらるれば輕薄といふ意を含み、正直だといはるれば、愚物であるといふ心を含んで居るのである。そこで人が世に處して行くにつけて用意すべき點は何とも人からいはれぬ様になるにある。何ともいはれぬといふ事は、自分が周囲の社會と全く同一である様によく調和して、敢て自分といふ特異の點が分らぬといふ様になるといふ事である。こゝの處が古人も所謂大賢は愚なるが如しといつて、戒められた所であると思ふ。

第十章 肉體と精神

扱て前に修養といふ事について、廣く話をしたが、修養とはつまり人間全體の働きを完全にせんが爲めに之れを養ふといふ事に過ぎない。精神が堅固であつて立派なる人を、修養が出来た人であるといふのも、その人の總ての働きのよく調つて居るのをほめた言葉である。人格が立派で奥床しいなどいふのも矢張り其の人の總ての働きの、ちやんと調つて居る様をいつたのである。精神といへば、それを内面よりいひ、人格といへばそれを外面より見たる様をいひ表はしたものである。誠とか正直とかいふのは心の方より見たもので、上品とか瀟洒とかいふのは外に見えたる様を名付けたものである。これを説明すれば斯く両面に分けられるが、實際は内外相合して分ち難い事。一つの人物、一つの人間としての働きは、表も裏も一つのものである、中に誠が無ければ外は上

品の様に見えても眞の上品なるにあらず、また實際、表より見たる處、何となく奥床しき様な人ならば、その心の中も、定めて床しいものである。普通徳の備つた人と云はれるのは、唯心が眞直でそして氣前がたしかである計りでは無いその人をうち見たる處、別段に其人と語らずとも、何となく、多くの人をその方に引き付ける様なよい處を持つて居る人をいふのである。

併し、唯是れを徳とか品とか云つたばかりでは、何處をどういふ風に學びてその品とその徳とを自分の中に備ふべきかが一向に分らない。そこで、前には精神とか氣前とか風采とか人格とかいつて一般修養として是れを説いたが今度は少し見方をかへて、他の側から分けて説いて見よう。それで先きに説いたのが一般修養といはるゝならば、今度のは特別修養とでもいふべきものであらう。併し此の様な名前などは勿論必要なものではない。

前述の如く、人間は内からと外からと見る事が出来る、人間は何によつて、

此世に現はれ出でたか、人間はどの様な目的を以て、古から今に至る迄、又今から後の世かけて、生活し行けるものであるかといふ問題は、最も肝腎な問題だが、さて最もわかりにくい問題である。今此處でそれを説くのは要は無いが、唯此處で考へて貰ひたいのは、人間といふものに明らかに両面がある。而してその両面は一つの様であつて、又二つの様であるといふ事である。人間に就て疑問の大なもの先きに云ふた第一の問題に次いで、直に此両面の關係如何といふ事である、二面とは精神と身體とである、心と身とである、心と身とは別々に働いて居る様であつて、しかも二つは離す事の出来ぬものだ、離す事は出来ないけれども、其の間に明瞭なる區別の印とする事の出来る事が一つある。身は目にて見る事が出来るが、心の方は全く見る事の出来ぬ事である。即ち一つの人間の中で目に見ゆる部分と、目に見えない部分との二つがあるのである、けれども、目に見えるものが直ちに身體であるとはいはれ無い、身體と

いふのも一つの働きに過ぎないので、目に見えたる姿は、その人間のあらゆる働きの一部分が外には見えたる物に過ぎない、夫れ故斯う考へて見ると、心と身との二つに人間を分ける事は無理であつて、人間といふものは、要するに一つの働きで、働きが外に表はれて身體容貌となつて居るといふ方が正しからう。さりながら此處では姑く分り易い様に、先づ人間を身と心とに分ち、又目に見えぬ働きそれ自身と、その働きが外に表はれたる様との二つに分ちて説くのである。

そこで、その目に見えぬ働きそれ自身といふ中には、實際には活動して居るのであるけれども、自分がその活動を知る事も出来ないものと、自分自身で今ごの様活動して居るかを識る事の出来るものとの二つがある。胃の働きとか腸の働きとか心臓の働き肺の働きなどは、常に於ては、皆自ら知る事が出来ないが、何か異變を生じた時になると、自分に分る。肺の呼吸も自分に深く呼吸

をするとか、或は高山へ登つた時などは自ら識る事が出来る、心臓の活動でも非常に激動した時とか、又は恥かしい時、怒つた時、喜んだ時には、すぐに自分に判るのみならず、胸の鼓動が常とは違ふ、胃でも腸でも、少し變があれば直ちに一種の感じがあつて、直ぐ判る。併しながら是等の働は、先づ平常に於て自分で識らずに、自然で行はるゝものといつてよい、この類の働は、自分で識らぬのであるから、自分で左右する事が出来ない。胃の働きやう、肺の働きやうが悪ければとて、直ちに是を自身で改める事も出来なければ、又、夫れ等の働が惡るればとてこれを以て、道徳上悪いといふ事は出来ない。唯まあ、一生涯の爲め、子孫の爲め永久の計として、十分生理衛生上の原則を守り體育に力を盡せば、何時の間にか知らぬ中に、前にいつた様な働らきは、皆な丈夫になる、固より生れ付きに強い弱いの別があり、生れて後に於ても種々己に影響を及ぼすものがあつて、いくら體育に注意をしても、何處迄も、強くなれ

るものではない、人々によりて強くなる事の出来る程度に限りはあるけれども、ともかくも體育に注意せねばならぬ。

併し體育に注意し、肺とか胃とかの働がいくら強くなつても、それが偉らい人物とも、善い人間ともいふ事は出来ない。馬鹿な人間にも其の様な働は、極めて丈夫なものが多し。まして昔大悪大奸といはれた者を考へて見るのに、多くは皆筋肉の逞しく前にいつた様な働きに於ては、常人よりも勝つて居つたものが多い様である。書に書いてある悪人の様子を見ても、顔から手から足まで常人よりも強さうに大きく描かれて居るのが多し、それによつても知るべしである。そこで眞に偉い人間なり、善い人物なりといはるゝものは是非とも前にいつた様なものは違ふ方面に於て、勝つて居なければならぬ、違ふ方面とは、前にいつた様な普通に身體の活動と云はれて居るものに對して、他の活動である、身體活動に對する他の活動とはいはずとも知らるべき心意の活動の事である。

る。

さて何處を以て明に心意の活動と身體の活動とを分つかと云はれれば答ふる事は出来ない、寧ろ一續きである。身體を運動するにつけても、歩行するとか、御飯を食ふとかいふ様な働きは、心の作用が加はらぬ様である。けれども今走らうとか、今ゆつくり歩かうとか思つて特別に心が足に命じて行かしむる事も出来る、聲を出し、話をする時なども、また自然に無心の中に聲が續いて出る様であるけれども、聲を大きくしやうとか、低くしやうとか思へば、直ちに其の通りに心の欲する所を身體中の機關に傳ふる事が出来る。まして外國語を學ぶ初に當つて、その外國語で話して見ようと思つて話す時の心の用ひ方は随分非常なものである。斯ういふ様であるから、全く區別はつかぬ、併し前にもいつた通り、この人間の働きに、自ら知つて自ら働らくのと自ら知らずして自ら働くのと二つある。否二つといふよりも、寧ろ、それは一續きのものである。

つて程度の違ひかも知れない。即ち働き様が各種あるけれども何れの働きも、その原始的のものは、總て自らに知られない、自然に働いて居るので、唯夫れ複雑となつた部分のみが自らに知られて居る、其の働き自身が自身に知られて居るやうな働きをすべて俗に心といつて居る。

翻つて、道徳上人を悪むいとか、善いとかいふて褒めたり謗つたりするのは元來その人の心柄に就いていふのである、時によると、或は、その表に見えた業に就いてかれこれいふことも勿論あるけれども、要するに、其の業を行つた人の其の時の心持が如何であつたかといふ事が第一の問題となるので、必ずしもその結果によるのでは無い、知らずして出来た事は、いくら結果が良い事でも、それは怪我拍子の功名であつて、別段に賞める事も出来ないのと共に、いくら結果が悪い事でも、これは亦矢張怪我過失であつて、重く咎むる事は出来ない。古から君子とても過あり、唯君子の小人に異なる處は同じ過を、再びせざる

にあるのみといはれて居る位である。そこでこの心といふ事が道徳上大變必要であるといふ事がわかる。眞の善と悪との區別はこの心の働きによるのであるといふ事がわかる。

第十一章 智 情 意

そこで心といふのは、いか様なものであるかといふと、夫れはいふにいはれない不思議なものである、中々今こゝに夫れをいひ盡す事は出来ない。人は身と心の二つより出来て居ると世の人はいふが、誠に人の人たる處は心にありといつてよからう。生人形を御覽なさい、いくら上手に、人間に似せても、心が無いによつて、それもこれも人間といふものは無い、昔の名人といはれた左甚五郎杯は、その彫り刻みし人形が躍り出したのによつて自ら驚いたといふ話がある、左様な名人ならばいざ知らず、先づ、今日の名人にては斯様に魄を自ら

拵えて體の中に入れる事は出来ない、夫れ故人間の形にしようとしても、人間にはならぬ。否實際のこの人間でも一朝不意に命を失ふ事ありとせよ、命の消え失せた瞬間には、肉も筋も、少しも變らぬか、最早人間の人間たる所は消え去つて、呼べど答へず石膏細工同様である。そこで此の心の持ち方といふものが肝腎である。心が主人であつて、身體が客である、身體の養生とか保育とかも必要であるが、それは心があるからで、心を養ふ爲めに體育の必要なのである、體育それ自身に價のあるのではない、心の爲めになるから必要であるのである。若し心の爲めにといふ事を始終考へないならば、體育をする事が却つて人世の害になる事が多いかも知れない。昔の心柄のわるい劍術使ひなどが良民を苦めた話などは随分澤山残つて居るのによつても心すべきである。

心の働は大凡三様の方面から見ることが出来る、一つは其所に硯があり書物があり、友人が居るといふ事が自分に分る、而してその書物に書いてある道理

が判り、友人の間に應じ、自分が答ふる事が出来るといふ様な働きである、之れを名けて知といつて居る。第二には、今此處に甘い物があると欲しいと思ひ、美しい花が咲くと見たいと思ふやうな働きでこれを名けて感情といふ。智といふのは。大凡世間にて知るとか覺えるとか、考へるとかといふ總ての働きを合めるもので、情といふのは喜ぶとか、怒るとか、哀しいとか、楽しいとか、愛らしいとか、悪いとか、欲しいとかいふやうな總てを含むものだ、尙他の一つの働きは、面白と思へばそれを試みると思ひ、苦しい時はそれを避けんと思ふやうな場合に、何でも是は斯うせねばならぬ、あれはそうしようと思ふ心持である。例へば朝飯がすんで次第に晝に近づけば腹が空いて来る、晝に近づく程その空腹の感が次第に増して来る、ひもじい腹がすいたと思ふのは一つの感情であるが、やがて食物が欲しくなる、空腹といふただの感情がここで、強い願望に變じたのである、そこへ前に何か食物が置かれるとそれをとつて食べよ

うとする、そのたべようとする瞬間の心持が、即ち前にいうた知慧とも違ひ、感情とも違ふので、これを意志というてをる。即ちあらゆる行の直接、原因になるものである、否現在行ひをして居る時の心持をいふのである。但しただ行といつても、廣くいふ時は、自分で何事も知らずに思はず知らず、行つて居る事がある、ばつと目の前に強き光を照らさるれば、思はずに、手で目を蔽ひ、或は目ばたきをするが如き、道行く時、足にたまく不快の物を踏む時は、思はず識らずに、飛び退くやうな事が、屢あるやうな類である。斯様に思はず識らずに行ふやうな行には、勿論意志といふものは伴はない、即ち自分でこれをかう爲よう、さうやらうと思ふ心持が無くつて、自然に出来るのである、かやうの行は、道徳上是を善とも惡ともいふ價は無い、倫理道徳上の批評に上る行は、是非自分で思ひ立ち自分で努め行つたものに限るのである。それで、直接に道徳上の行を考へて見る時には、先づ第一に意志といふものを考へて見なければならぬ。

第十二章 意 思

さて意志とは、どんなものであるか、文字からいへば、兩方とも、昔から使はれたものである、中庸といふ書物にも「心を正うし意を誠にす。」と説いてあるところの、そのいはゆる意で、意は心ばせいひかふれば心の走るところと譯し、志は心ざし、即心が指しておもむくところと譯せられ、それが總て言語文字といふものは久しい間使はれる間には人々により處々により多少の相違を生ずるを免れぬ、必ずしも、いつでも正格なる意味を以て使はれて居るといふ事は無い、あの人は志がぬるいなど云ふ時には、志はたゞ心といふ意味に止つて居る。又意といふ文字はたゞ心とか思想とかいふばかりの意味に用ゐらるゝ場合が多い意見とか極意とかの意はこれだ。こゝに云ふ意はそのやうなひろい

意味ではない、中庸の誠意の意の意味で、あらゆる行動の直接の原因となるものをいふのである、上野に櫻の花が咲いたといふことを耳にしただけでは、それは、ただそれを知つたのみで一種の智識であるが、それを情とも意ともいふことは出来ない、所が會ふ人達が皆自分にその花の美しさを語るを聞くに及んでは、何でも、自分も一度はそれを観たいものだといふ思ひが油然而として起る夫が即ち情である、されど忙しくして、その目的を果す事が出来ないで居るやうなときに、尙益花の面白きを説かるゝといふと、どうあつても見たいとおもふやうになる。それが願望といふ心の状態である。その願望の状態が一步を進めると、今度は、どうしても花見に行かなければならぬと其う思ふ、かく自分で以て自分に命じて、是非何々しなければならぬ、そうしなければならぬといふ、その時の心の状態が即ち意志といふものだ。即ち静平な心が一轉して流動に向つた状態をいふのであつて、この消息は心ともいはるゝ心の中の大秘密

である大本領である。げに、こゝに是を、筆もて十分に書き現はすことが出来ぬのである。筆にかけば、最早、それは所謂意志の本領を失つて智慧のやうになつて了ふ傾があるのである、これは古人が水の流れんとするに例へて、心ばせ、心ざしと譯したのは洵に當を得たものであつて、走せとか指しとかいふのはみな流動の意味である。若し意志といふ状態を示さる心(嚴格なる意味に於ては、いかなる心の状態にも幾分か意志の伴はざるなき事故この事故と考ふべからずと雖も、先づ姑らく、極めて意志が現れる事の少き場合を想定して)が溜り水は譬ふ可くんば、意志は流動せる水である、流動して岩に當つて岩を動し、土に觸れて土を洗ふ有様が、丁度意志起つて手足動くと同様になるわけである。

夫故意志といふのはだれにでもある、心の必然の状態である。心の外の様々の働が全く無くなるといふ事は、つまり死を意味するが如く、意志がないとい

ふ事も亦同じく死を意味する。扱て然らば、かういふものが何故人間にあるかといふ問題が起るかも知れない、併し、それは、なせ此の世間に人間があるか、日月があるかといふ問題と同じ事で、神ならでは答ふる事の出來ぬものであるそのやうな事は、今茲に論ずる時をなれば、用もない。こゝに大に必要なのは、其の意志といふものが、いかに成立して居つて、またその成立する状態が如何なる條件に於いて支配せらるゝものであるかといふ事である。

そこで先づ意志といふもの、成立に就いて考へて見ると、是を分量上と性質上との兩方から見ると、分量上の方から先づ話して見よう、分量上からは是を見ると大量と少量との差がある。大量の方は強い意志と俗にいひ、少量の方は弱い意志といつて居る、その意志の強い弱いといふのは人々によつて違ふのは勿論同じ人でも、時により年によりちがつて居る。その差如何によつて人間社會の有様に千差萬別を生じ、悲しい事も、歡ばしい事も皆是によつ

て起る事となる。所謂強者と弱者とが互に争つて弱きが負け強きが勝つ、よくいふ所の弱肉強食といふ有様を生するのである、この弱肉強食の顯象は生存競争によつて起り來る必至の事實であつて、而もこの事實が必至であると共に、この事實を調和して、それから起り來る慘毒を防ぎ止めやうとする道徳的活動といふものもまた同様必然にこの社會に表はれて來る。然るにこの二つの人間界の大事實といふものは要するにこの人間にある意志といふ働きが兩様に表はれたものに過ぎないのであるから、誠に意志の事に就きては十分によく考へて見て、その働きのついて、うまく舵を取つて行くといふことは人生一代に取りて最大要事でなければならぬ。

第十三章 意育と體育

何故意志に強弱が出来るか。これは意志が何故人間にあるかが分らぬと同じ

く分らぬ問題である。唯吾人は意志の強弱と關係最親密なる他の事實を發見するのみで満足しなければならぬ。即ち一方が盛なれば他も盛に、他が衰ふれば、一方も衰ふるといふやうな事實の關係を見つけて、それで満足しなければならぬ。で、その關係の最も親密なるものは肉體である。或る論者によると、全く意志の源を肉體に歸して説明して了ふ、即ち肉體の直接の結果として意志があるといふやうな風に説く人もないが、それは云ひ過ぎである、併し、兎も角も、身體が丈夫な人は意志も強い、が、弱い人は、意氣地が無い、同じ人間でも病氣の時と、健康の時とは、非常にちがふ、病氣であると書物を讀まねばならぬ、手紙を書かねばならぬと思つて居ても、思ふやうに出来ない、手紙を書く位の事でも左様であるから、それ以上の事については尙更である。それ故昔の人も健心は健身に存すといつたわけで、まことの大丈夫といふものが果して強い意志といふことを以て、最大肝腎なる要素となすものであるならば、

大丈夫たらんものは是非先づ大丈夫なる身體をもつて居なければならぬ、併し乍ら大丈夫なる身體とは、何も目方が重い、脊丈が高い、骨組が太いといふやうな意味ばかりではない、目方も骨も肉も長も皆必要であるが、その外に、その全體の身體の成りたち具合に於て、調子がよくなければならぬ、四肢體軀の各部分が不揃であつてはならぬ、分量の上のみならず、性質の上にも同じく優良でなければならぬ、意志と生活力とが、どのやうな關係をもつて居るかといふ事は別問題だが、兎も角も大關係をもつて居る事は言はずともこの事である其の生活力といふものが必ずしも身體の骨格が大い小さいとか、目方が重いと軽いとかによつてのみ強弱を生ずるものでない、目方が減じても、寧ろ生活力は増す事がある、殊に人が違ふ時は、その事は尙一層明瞭で、小さい人が必ずしも大きい人より生活力に於て劣つて居るものではない、甚しき例をとつて見れば慢性肺病で瘡せて居つても随分三軍を叱咤するといふやうな元

氣の強い人があつた位のある。それでこそ、昔から、この意志の働くと肉體の方とは全く別のもので、肉の方は、賤しきもの、塵芥と同じもので靈が其中に宿らなくなれば腐つて了ふ。意志の働きは、全く身體とは違つて靈の働きである、それ故或方面から見ると、身體が衰ふれば衰ふる程一種の正氣が充滿して來ると考へた人も澤山ある。それからは全く意志といふものを、身體と分つて考へ肺病のやうな慢性病によつて漸次に衰弱して行く人が、其の衰弱に伴れて志氣却つて増し常に浮ぶべからざる奇想なども、斯かる時に當りて油然として湧き出るといふやうな話が多くある位である。

斯く考ふれば中々六かしい問題だが、併しまあま普通の場合に於ては、肉體と意志と同伴し、相互に原因するのは、誤のない事實として許さなければならぬ、それ故よし直接に意志を養ふ方便がないとしても、身體を養ふて、或程度まで丈夫にする事が出來たならば意志も亦ある程度まで丈夫になること云つて

よい。

第十四章 意志の目的

第二に意志の強弱と關係する最も重大なる事實は、意志の境遇如何即ち意志の目的になるものの如何といふ事だ。或る意味から見れば、己の意志に對して己の身體も目的となる一つである。身體は意志を宿すものであるが併し今日の學術上からしていへば心が心の殻である袋であるなどはどうしても考ふる事は出來ない、さやうな考は千年程以前にあつても尙學者が許さなかつた考である。今日の眼からして見れば、先づ天然に心と身の二つが斯くの如くあつて、その二つが相關係し、相發達して居ると見られてゐる。そこでどういふやうに二つが關係して居るかといふと、心は心が働きの目的となり、身は心が働く其の目的となつて居るといふ事である、といふ意は、身體は心をあてにして

動靜し、心はまた身體あるが爲に動靜するといふのだ。手が動く、足が歩むと云つても、その動く、歩むといふ働は、心を満足せしめようがためにする事である、又心が喜ぶ悲むといふ、その心の喜ぶ悲むといふのは身體あるが故に喜ばしい悲しいといふ事になる、心の前に身といふ對象が苦しいとすれば、喜びとか悲しみとかの意味は殆んど分らぬのである。心全體をこめて知ることも感ずることも全體につけてはなしても、右のやうに説明が出来るとおもふが、殊に意志のみに關して云ふ時は格別に然りである、わが意志の働きの前に、わが身といふことが無いとすれば、わが意志といふ事は殆ど想像し得ない、斯くせねばならぬといふ事の中には、自らわが身といふものはその心持の後壁になつて居るのである、されば我身といふものは最重要なるわが意志の目的であるそれで、特に、それを別に説いたのであるが、其他わが身以外の萬般のもの皆わが意志の目的となるのである。その目的の大なるか小なるか、その對象の長

く續くか、早く交代するかと云ひ換ふればその目的對象の分量性質時間等の如何によりて、わが意志の活動は極めて鋭敏に影響を被る次第である。併しこゝに心を附くべき事は、要するに天地間の現象は先づ心と物との二つに分別すべきであつて、その二つが相互に彼は此の此は彼の目的となつてをるといふ事であるが、併し外物がわが意志の目的となるには是非共、外物が一旦我心に知られて我心の智識とならねばならぬといふ事である、外物は直接に我が感覺の目的となるが、感覺以外の目的には直接になり得ない、それ故感覺以外の心の働きが外物を對象とすといふても皆それは感覺を通じた外物である、意志といふやうな働きになると、たゞ感覺のみを通じた外物といふわけではない、或は記憶せられ思考せられたる外物を目的とするのである。それ故我が意志が目的如何によつて變化すといつても、實は自ら我が作りたる目的によつて變化するわけであつて、考へやうによりては、自らの意志が自ら目的を作つて自らの意

志を變化するやうなものである。平たく云へば我自らの心が自ら目的を作つて自らの心を制限し束縛するやうなものである、斯く考へて見れば我自らが我意志を修養するといふ事は甚だ重要な意味を有する事で、大變面白い事と思ふ。古來東西洋に行はれた様々な膽力養成法とか、元氣修養法なども甚だ面白い、殊に、東洋に於て、或一派の學者等により説かれた處の六經我を註す、多くの書にかいてあることは、我心を解釋したるのみ、此世界はつまり、我心といふものより外にはないといふやうな考も、中々、味のある説といはねばならぬ、これが、もう、さやうに考へられずして、矢張りわが意志が、純然外物を目的とし、その外物如何によりて、變化するといふやうに、考へねばならぬのであると、我々が意志を修養するには、先づ、我々が外物即意志の目的となるものを動かさなければならぬ。或は大人が子供の爲に、その外物に手を入れてやるといふやうな事ならば、或は出來ないでもないが、大人たる我が、我自らの爲

の、自らの外物を左右せんなどいふ事は、極少部分しか出來る事ではない、従つて、又自ら自らの意志を修養するのも、殆んど不可能の事となつて了ふ、所が實際は、前にいつた通りで、畢竟は我心にて我心をくゝる、我意自らが、我意の目的となるのであるから、我自らが、自らの意志を修養する事が出來るのである。

第十五章 克己酒色の戒め

前には意志の強弱について云つたが、今こゝで意志を強くする爲に、心すべき事を一言に約言しやう。即ち第一には、身體を丈夫にすることで、衣食住について、よく、衛生の法則を守り、日常仕事をして行く上に就いて、いつも、身體に氣を付けて行くことである。二十四五位迄は、十分に身體が發育する故、それ迄の若い間は、出來る丈わが身體を強大ならしめんと心がけねばな

らぬ、それ以上の年齢になると、最早身體は大きくなならない、それから、成るべく、身體を害はぬやうにと、心がけて行くことである。第二には、自分の周囲のものに氣をつけて行くといふことである。これは、身體の養生の方よりいつても、極めて大切のことだ、意志の養ひといふ點に於て更に、直接に、必要なことである例へば、こゝに、如何にしても學者にならんと思つて勉強した人が、目の前の詩歌管絃の樂に心を浮かさるゝことあらば、それこそ、大失策である、何も、詩歌管絃といふことは、悪いことではない、是れ亦人間社會に無くてならぬものだが、しかしすでに學問を爲ると決心した以上は、詩歌は客である、學問の方からいへば、成るべく詩歌といふ客の方へ横道をしないがよい、それは横道に心を奪はれては、學問をするといふ意志が弱くなるからである。

但し、この周圍境遇については、意志との關係上、二様に考ふる事が出来る。

一つは、意志を強くする爲である、他は或る意志を一つに集合して横へ散らないうやうにする事である。前の例について云へば、學問するといふ意志を益強くするといふ方と、學問するといふ意志とは反對の方に向ふやうな意志を横へ放ちやるといふ事である、併し是はつまり、同じことで、反對の意志を妨ぐるといふことは、つまり一つの意志を強くする事に外ならぬ。意志それ自身の修養といへば、此の事を第一の要事として考へなければならぬ、たゞ意志意志といつても、何の意志であるか分らぬやうな、ぼんやりした意志は何時でも、實際には表はれて來ない、いつても、何かしたいとか、何々のめあてに向て進まんどかといふやうに、はつきり定つたものである、それ故、一つの意志が表はれると、それと共に必ずそれに反對するやうな願望意志が横に並んで居る、例へば、今日は朝から書を讀まんどいふやうな意志が表はれると、それと共に、いや天氣がよいから朋友を伴うて散歩をしようといふやうな望も、陸にある、

それが、一步油断をすると、讀書といふ意志は消え去つて、散步といふ意志が勝つて了ふ場合が澤山ある、是は、讀書の方から見ると、失敗に終つたのである、されば十分に讀書の決心をするには、他の是れに反對するやうな願望意志を防ぎ止めるといふ事が最も大切である。同じく自分の意志であり、自分の願望であるのに、その一つを堅く守つて他を退けるといふのだから、そこが洵にむづかしい、非常な苦痛である、つまりあらゆる一切の苦痛といふ事は要するに、この意味である、この苦痛に打克ち、忍びおほする事が出来る、最早其人間は大した成功を得たもので、光風霽月氣持のよい世界に到達し得る、宛も天憐愍として黒雲を起し、雷なり、稻妻ひらめく凄き世界の後は、風死し波穩にして月影清き快晴を現出するやうなものである。古來、刻苦忍耐克己自重なごいはれて居るのは、このところの意味を語つたもので要するに、己が斯うと決心して、一つの意志を立てた以上は、固くそれを守つて、動かざること山の

如く、蝕せざる事石の如く、泰然として他の誘惑に打克ち、嚴然として他の邪魔を排除するといふ事だ。
昔から、煩惱の炎とか意馬心猿とかいはれて居るが、それらは果して何を意味するか、この所にてらし合せたならば、直ぐ分る、昔より成功した人と失敗した人と、又英雄豪傑といはれて、崇めらるゝ人と、不埒懦弱といはれて後指をさゝれる人と、その區別は、何より生じて來たか、少しく考へて見ればすぐ分るのである。昔は子孫のために黄金を貯へず、美田を買はずといつた人がある、その故は何であるか、黄金土地といふ事の望の爲に、それよりも肝腎な願望意志が忘れられて了ふからだ、或は孔子の弟子顔回といふ人を讀めて、一簞の食一瓢の飲、その樂を改めずといつた、これは顔回が學問の爲に意志をたて、飲食などに心を囚はれなかつた事をほめたものである、人間が意志を立て、行く即ち立志といふ事の前には、いつも、その邪魔となり、ごうかする

とこれを崩壊し去らんとするものは、樂みといふ事と恐れといふ事との二つである。而して、その二つは何處から來るかといふと、つまりは食色の二つである、色といふものは大體に見たい、聴きたいといふやうな處から起るのであるが、その中に、最も怖る可きは男女兩性間の迷ひで 性慾と名づけて居るが、大凡あらゆる慾の中で性慾と食慾との二つが、最も強烈なもので、又最も危険なものである。この二つを得たいために多くの人はどんなことでも犠牲に供して了ふといふやうになる、而して此二つの裏になつて居る最大なる恐怖といふものは死亡といふ事だ。實際人は前の二つの望を遂げ、死亡を避けんが爲に、毎日汲々として居るので、人が生きて居るといふ意味は、畢竟、此等の慾を充たし、その恐を去らんとして働いて居るといふ事だ、かくの如く、それ等は、寧ろ人生の必然といふてよい位のものであるが、扱て、人間は直接に、それを目的として、その事のみを一心にめがけて、仕事をする、その望みの中

の一つも叶へられないで、却て最も恐るべき、避けたい避けたいと考へて居るその死といふものに出くはして了ふのである、尙一だんと考へて見れば、人間には食色と生死とより外に目的がないものであらうか、そこは、餘程疑はしいものである人間と禽獸とは別があるか無いか、人間は何の爲に生きるか、はた死するか、其様な事は知らぬが、兎も角も吾々は人間といふものは生死以上食色以上の大目的があると思つて居る、否思はなければならぬ。此の大目的の爲には、食色生死の總てを犠牲に供するといふ事が最も大切であつて、歴史上の大人物は皆これを成し遂げた人である。その大目的に達せんと決心するのが即ち人間の大意志である。昔の大徳が大勇猛心を起したといふのもこれである、この目的たるや、一人一個の目的に非ず、人類通有世界共通の大目的である。この目的によつて人類は絶えず動かされ絶えず生きて居ると知るは智者であり、然らざるは愚者である。智愚の別はあれども二つとも此の大目的に支配せられ

て居るのは一つである。この目的に向つて進むといふ共通の意志が、即ち人類普通の精神である、この精神をよく汲取りたるものは、即ち世界と自己とを同一にして、未來永劫に至るとも終始滅せず、肉體は死しても、その人は死せず況んや貧賤侮辱等によりてその人眞に死するものならんや、菅公楠公は今日でも生きて居らるゝのである、弘法大師も日蓮上人も今日尙生きて居らるゝものである。

この點は今日の若い人に大いに考へて貰ひたいのである。三年鳴かず飛ばず飛ばばまさに天をつかんとするといふことあり尺蠖の縮むは伸びんが爲めなりといふことあり、大なる目的を抱ける者は常人の忍ぶ能はざるを忍び、常人が抑ふ能はざる情慾願望の萬事を抑へて、その目的の爲に犠牲とするのである。諸子よ西郷吉之助、若き時、如何に辛苦を嘗めたか、日蓮上人の龍の口の法難は如何なるものであつたか。古來高僧知識が一生の間、葷酒魚肉を近けず、

女人禁制の戒を守つたといふは、抑々如何なる故か、多くいふを要しないのである。何も酒がわるい毒であるといふのではない、酒食に絆されて肝腎の目的を忘れて了ふのを恐れたのである、何も女が實際に魔物であるといふのではない、女は罪なもの、女は夜叉と思へど、いはれたのは、女それ自身が悪いといふのではない、誰しも迷ひ易きは色の道であるから、これに陥つて大目的を失ふ事が多い故に、これを救はん爲かかる極端な譬喩の言葉を以て戒めとしたのである、世の中には随分青年諸子を迷はすやうな論説が多い人間とても、別に禽獸と異つた所はない、先祖は同一である、それ故人間の目的は唯食色にある事、禽獸も同一である。道徳とか義理とか六かしい事をいつても、畢竟は生きるといふより、外に望みはないといふ説もある。或は又、男女相交り相慕うが何で悪い、戀愛は神聖なり、これは理窟で排斥すべきものに非ずといふやうな事をいふ、これらの者は學説として、これを唱ふるは、唱ふる人の勝手だが、諸子が

實際に修養して行~~ふ~~つについては、かやうな説は皆これを邪説として、一切ふりむかず、聊かたりとも、かやうな説が、自分の頭の中に、成程と思はれるやうな事があつた時には、それこそ最早蟲が腹綿を蝕み初めたものであると思つて悚然として恐れねばならぬ。

第十六章 小勇と大勇

上來の説述により意志を強くするといふ事の中には、甲の意志を強くせんためにて、其他一切の意志を排斥するといふ意味を含んで居る事が分つたであらう、言ひ換ふれば、己が目的とする意志を強くせん爲目的以外の意志を排斥するといふ事だ。そこで意志に就いて、どの意志が善いか悪いかと見分けをつけ、善いものを強くして、悪いものを排するといふ風にしなければならぬ。即ち意志の分量に氣を付けるのみならず、その性質にも氣を付けねばならぬ。いくら

意志が強くても、人の物を盗まうとするやうな意志は、少しも價がない。斯様な意志は、弱い程よい、否全く無くして了はなければならぬ、それで、たゞ、分量上より意志を見ては、非常に優勢な人でも、それを性質上より見るときは三文の價なきのみならず、却て有害なものが澤山ある。そこで、大に意志の性質を善くするといふ事について考へて見なければならぬ、昔から智仁勇の三つが主徳として數へられて居るが、その中の勇といふのは何も唯意志が強いといふ許りの意味ではない。善い意志が強いといふ意味である。人間が人間の性質若くは行爲として賞むべき勇は、此の意味の勇より外には何も無い、所が、世間普通の言葉によると、この勇といふ言葉が、或は廣く或は狭く種々様々に用ゐらるゝによつて、非常な間違ひを引き起し、又青年達も、よい事と考へて得意になつて、大に間違つた事を行つて居るものが随分澤山ある、是は古來の事實で、いつの頃の學者先生も、餘程是れには困つたものと見え、様々と善い

勇と悪い勇とを分けて、世間に普通に傳はつて居る勇といふ事の價を判断し、これを褒貶したものだ。勇といふ文字は、もとは漢字で我國のいさむ、いさましいなどの言葉と同様だが、夫程でもない事に、いさんで大變よい事と思つて居る例が多い。いさみ肌と云ふやうなのはそれだ。いさみ肌といはれて居るやうな人物が實際どのやうな事をしたが爲めに、此の名を博したのか思ひ半に過ぎよう。

血氣の勇に逸るなど、昔から戒められてをる。或はまた猪勇とか、暴虎馮河の勇とかいふやうな言葉もある。皆勇らしくして、眞の勇にあらざるものになつたのである。血氣に逸るとは、前後の考えなしに、出來心に任かせて夢中に突進する事で、猪武者といふのも亦然り、暴虎といふは虎を手でうち、馮河といふは河を徒にて渡るといふやうに無鐵砲な勇氣を形容したものだ。蠻勇の字の通り、わけのわからない意氣込みといふやうな意味だ古來同じく勇とい

ひ乍ら、これらのものを戒めたわけは、畢竟斯んな淺はかな事では、切角勇氣があつても、その甲斐が無いばかりでなく。其んな詰まらぬ勇氣に馬鹿力を入れて居るものに限つて、眞の勇氣を失つて了ふといふ事を恐れた故だ。千金の子は、盜賊の手に死せずといふ古語がある。立派な身分に生れた子は、家に對し、自分に對する己の責任の甚だ重き知れるが故に輕々しく盗人などの相手となつて命を落すやうなつまらぬ事はせぬといふ意味だ。古來犬死といつて戒めたのも、つまり同じ心で、同じく命を捨てるならば、一廉のためになるやうに是れを捨つべきで、輕々しくすべきでは無いとの意だ、河に徒にて渡らすとも船がある。虎は素手には打たずとも、及物もあれば弓鐵砲もある。それを自ら勇に誇つて、所謂暴虎馮河の振舞をなすのはまことに下らぬ事である。

似而非勇氣を戒むべきは、前述の通りだが、扱て實際に於ては偽の勇と眞の勇との判別は誠に六かしい。實際自分が仕事をする段になると、那邊までが偽

で那邊までが眞の勇氣であるか判断するのに苦しむ。人の行を判じ別けるにも、これはなかく困る。昔からの卑怯者臆病者は皆それ／＼理窟をつけて、自分は犬死するのがいやだからなごといつて、その實は卑怯を蔽はうとしたものが多し、これは最も心すべき事である。

先づ、あらまし、似而非勇氣と眞實の勇氣とが分る、所を考へて見ると、自分の名譽心が先に立つとか、自慢己惚が増長するとか、情の激する儘に任せるとかいふやうな場合に、いつも勇氣らしい偽があらはれて來るのである。例へば、非常に腹が立つと前後も考へずに、情に任せて無理な事をし、後で後悔することが屢々ある。昔、支那の張良は、鐵椎で、時の天子秦の始皇帝をたゞき殺して國の讐をうたうとしたのはこの類である。處が、的が外れて、側の副車を撃つたので、始皇から非常に怒られて、自分の首が懸賞となつて、御ふれに出るといふ始末、やつとの事で、隠れおふせて了つたのは、もつちの幸であつ

たのだ。そこを或る賢い老人が、惜しいものだ、才子であり乍ら、忍耐が乏しい、血氣に逸る癖がある。どうか、正してやりたいとおもうて、下邳といふ處の河の橋の上で、沓を拾はしめ、其の心をためした。而して、眞の大人物は小さい事にはあせらぬものだといふ事を教へた。それから、此の人は、全く心を改めて、大度量を養ひ、終に漢の天子の補佐となつた。

又張良と同じく漢の天子の股肱と頼まれた韓信は、その幼い時分には、或る市中で、多勢の若者具に辱かしめられ、股の下を潜れよと云はれたとき、劍の櫛に手をかける事もしないで、平氣で股の下を潜つたといふ話がある。我國で、かの塚原卜傳が、さる船の中で、侍に會つた時の話を見給へ、卜傳といへば、當時の腕利の名人であつた處が、或る時、船に乗つて旅をすると、同船の或る侍が、自分に向つて、滔々と劍術の講義を仕始めた。了ひには、議論を仕始めた。並々の人ならば、そこで腹を立てる所であつたが、卜傳は平氣なもの

で、其様に議論をするなら、一つ向うの島で勝負をして見よう。君はどんな刀でもそこで振廻すがよい、自分は無手であしらはうなどと笑つて答へ乍ら、扱て島へ来た侍が上り、刀を抜いて決闘の用意を仕て居るのを見て、自分は島の島へ上らず、やをら、船棹を以て、船を反對に海の方へ押し出し、島の上の侍が卑怯だとか何とかつて、喚き叫ぶは目にもかけず、是が自分の無手勝流だといつて島に置き去りにして了うた。こんな例を上ぐれば限りは無いが、真勇と偽勇とは一寸右のやうな鹽梅のもので、却々區別がつきにくい、其間に又却々味がある。古人も、一寸した事にすぐ恐ろしい顔をし、腕力を振廻すやうな者は誠にこせくした小丈夫だと喝破したが、成程さやうで、大賢は怯なるが如きと同じ意味で大勇は怯なるが如く見ゆるものである。そこで一寸外面から見ると、大勇と卑怯との區別がつかぬ。大勇でも卑怯といふ評判を得る事が屢々ある。小勇、血氣の勇は、誰にでも出来るが、大勇は、真の大丈夫でな

けれど之を望み得ぬ。昔武田信玄が、二人の侍を越後へ使に遣つた時、行きかけの途で甲の侍は敵の丸を避けて行つた。すると乙の侍はそれを臆病だといつて非常に笑つた。所が歸りがけには、甲の侍は、一向平氣で、敵の丸の澤山落ちて来る所でも構はず通つて歸らうと云ふと、乙の侍は、いや最早懲々だ、自分は前にそこを通つて膽を冷やしたから赦して呉れよといふたが。甲の侍は、何それしきの事にといつて、その危い道を、ごし〜と通つて歸つた。而して、乙に向つていふには、初め往く時には、主命を荷へる身。自分の命は、自分のものに非ず、故に自分は彈丸を避けたのだ。歸る時には已に主命を果し終つた後故、全く自由の身だ。其故彈丸を恐れぬといつたといふ。諸子は、この二人の中、果して何れを眞の勇者なりと考へらるゝか、これ等について、色々と考ふれば、自ら真勇偽勇の區別が分る事と思ふが、偽勇とて、全く無いよりは勝つて居る。どんな刺戟があらうが、蚊蚋程にも思はずじつと控へ

て居て、さて、出すべき時に大に勇氣を出すといふ人が、真に傑いが、併し、實際どんな刺戟があつても、それに應ずる力がなくつて始終沈んで居るといふやうな意氣地なしは役に立たぬ。俗にいふ意地意氣地といふのは、却々面白い言葉で意地張りといへば悪い意味にいふが、これは悪意地張りの義で、もし善意地張りならば、何も悪いことは無い。血氣の勇なども、之を抑へ盡すべきものではない。これが真の大勇となる萌芽であるから、これを導いて大勇となすやうに心がける事が肝心である。それで、先づ全く勇氣のない臆病者は、初めは小でも大でもよいから兎も角此の意地を養はねばならぬ。畢竟するに、大勇小勇偽勇真勇の別は、智慮の淺深の問題で、情に任せて、智慧を缺く時は、小勇となり、小勇に逸つて大勇を失ふのである。そこで、情を抑へて、智慧で考へるといふ事が極めて肝腎だ。大勇小勇偽勇真勇を分ける標準は、いつでも一様といふわけには行かない。時により場合により斟酌すべきものであつて、そ

れを適當に定めるのは、全く智慧の賜である。

第十七章 勇の養成

情にはやるといふ、その情の中で著しいものは己惚新名譽心で、一寸辱しめられると何だか、自分の價値が下つたやうに思ふ。俗にいふ顔に泥をぬられたやうに思ふ、これです。泥を拭はうと云ふ所から、詰まらぬ瘡我慢を張り、思はぬ腕力を振廻す事もある。又人から泥を塗られたといふやうに思はるゝ場合で無くても、人から賞められよう、傑い強いと云はれようと思ふ所から、入らぬ腕力を出すやうな事もある。これ皆戒むべき事で、災の源である。名譽心、廉恥心といふ事は洵に大事に之が無ければ、人は死んで了ふものだが、扱て又その大切な丈それ丈、自分に厄する事も多い、刀物といふものは物を切るには極めて大切なるものだが、それがよく切れる丈、それ丈注意せぬと、禍を

醸す。名譽心程大切でありながら、恐ろしいものはない。かういふ處を、上手にとりまはし、取扱うて行くには、全く智慧を磨き、自分にいろ／＼と考へ、世事に長けるといふ事が肝心である。

僞勇といふのと、臆病といふのとは、大分意味が違ふ、僞勇の方は、勇氣の芽はあるが、その使ひやうの間違つたものだが、臆病は全く勇氣が無いのだ。僞勇の方は、時によると爲になる事があるが、卑怯臆病になると、全く役に立たぬのみならず、大いに世の中に害となる。臆病といつて一種の病といはれてある通り、勇怯の別は、自然の生れつきにある事も多いが、さりとて、生れてからの心の用の方によつて、どうにでもなる、天性勇氣乏しいとて、失望してはいけない。又怯者を天性なりとしてその罪を許す譯には行かぬ。そこで克己といふ事が極めて必要になる。恐ろしい、辛いと思ふ事、忍んで敢て爲すといふ事が極必要である。武田信玄が、臆病な兵を樹の枝に縛りつけ一日敵の矢面

に据ゑ置いた處が、終には、非常に強い武士になつたといふ話など、此の克己の一例である。

後光明天皇が、雷鳴を非常に御怖れ遊ばされたが、雷鳴の時には態々御座の御椽に設けて、その恐怖を矯め給うたのなども此一例である。

勇怯を分つ最も強い原因となるものは利害の念だ。利害に迷ふ處から命が惜しく有財産が惜しく従つて自ら大難大苦に打克たうといふ氣力がなくなるのである、利害眼中におかず、大事に處して平々漠々と、身心を處し得、時に臨みて、そこに命を抛つ事が出来れば、それこそ、大勇敢の目覺ましい事が出来る。大人物と小人物との分る、所、大勇者と大卑怯者との分る、所、詮ずればこの利害に迷うと否とである。自分の利害を勘定するといふ心、この心は、人々に極めて大切なものだ。これが無いと一身一家の獨立を全うし得ない、一人前の人間とはなれぬか扱て、前の名譽心と同じくこの無くてならぬものが、また

大變に妨をして、人間を大の臆病者にして丁ふ。赤穂の家臣で大石始め多くの侍が、忠勇無二の壯舉を立てたのにも拘らず、大石と並んでゐた家老職の大野九郎兵衛が、後込して、萬代に汚名を止めたのは、全く自分一家の利益計算に迷うた故だ。昔より、自分の家の子郎黨を金持にするなれ、金持となれば、軍に弱くなるからといった話がある、成程左様で、貧乏である程元氣がつく、少し金でも貯へて居ると却つて、何事をするにも控へ目にするやうになるが、素寒貧のものはいつも人間至る處に青山あり、之く所として家に非ざるなし、人の物は我物といふやうな心得で、一向無頓着で、どしどしと思ふ存分の事をする、林子平といふ人が六無の歌を作つて、志氣を鼓舞した通り、又孟子が、憂患なる場合には生々すれども、幸福なる場合には活氣が無くなるといつて嘆息したとほりこの道理は萬古不變である。昔の侍でも、東北とか九州とかの田舎の人程、戦に強く、中國の方が弱かつたが山國とか僻遠の地方の人とかい強

かつたといふのは同じ道理で、京や大阪のやうに早く開けて人民が利益にのみ汲々として居る所では、妙に、勇氣といふやうなものが乏しくなつて了ふ。故に歴史を見ると、いつも都人士と、田舎漢と競争し、都人士が負けては、又田舎漢が都人士となり、また第二の田舎漢に負けて居る有様が洵に面白い。この事實は何も、乃物の軍に限つて居るのではない、商買上でも矢張り差様で、實際都會の商買人で長く子孫代々榮華の續いて居る家は極めて稀である、現在京都のやうな市でも、祖父の代から京に住んでゐるものは三分の一位で三分の二以上は伊勢、近江、丹波等の田舎人が在來の京都人と競争して勝を占めて暮して居るといふ話である。東京でも、大阪でも其様な例は著しい、現在吾々が名前を聞き及んで居る名高い實業家でも、其の故郷を考へて見給へ。大抵は、皆遠國から頭を上げ出して、中央大都に座を占めた人ではないか。此の例は古今に極めて著しく、恐らく將來とても、この通りであらう。そこで現在勢力のあ

る都人士は最早下り坂で、將來第二の田舎人との戦に於て負けざるべからざるやうな運命を持つて居るといつてもよい程である。これらの實例は青年諸子が實に深く注意しなければならぬ所ではないか。

勇氣が表はるゝ有様について見ると先方から自身に向つて出て来る苦しい刺戟に打克つてこれを忍ぶといふやうな側と、自分の方から進んで彼方に向ひて猛進するといふやうなものと二つの方面がある。後の方は果敢とか奮發とか、武勇とかいふもので前の方は刻苦、堪忍、克己といふものである。その外種々の言葉があるが多くは擧げる必要もないと思ふ、果敢といふのは思ひ切りのよい事で北條時宗が、一旦うんと決心をして、元寇を塵になし、織田信長が短兵急に今川義元を桶狭間に仆したやうな業をいひ、奮發といふのも、似たやうなもので、自分でこれをやつて見ようと思ひ立ち元氣を出してやる事で、紀國屋文左衛門が勇を鼓して、荒波の中を物ともせず、紀州蜜柑の船を江戸迄送り、非

常に利益を得終には江戸の名物男となり、河村瑞賢が江戸大火の折柄時機を見えて木曾山中へ早飛し、材木を買ひ占めて、これを江戸に賣出し、大利を占め得たといふやうなのは此の例だ。勇武といふのは軍の上には表はれた勇氣で、我が國の歴史上に其の實例は最も多い。八幡太郎、源義經、平知盛、能登守教經の如き、世の人に歌はれて居る。加藤清正の如きも、古今稀有の勇士である。又戊辰戦争、西南戦争、日清戦争、日露戦争の時も、さうした勇士が澤山現はれた。

勇敢とか武勇とか奮發とかいふのと、堪忍、忍耐、刻苦とかいふのとは、決して別物ではない。同じ勇氣が反對の方向に表はれたるものである。實際には此の両面は多く結び付いて居る。克己忍耐の出来る人でなければ、奮發も、武勇もない。果敢勇猛の人ならば、又必定非常な忍耐をもなす事が出来る。加藤清正が蔚山にて籠城した如き非常の忍耐である。その外、人より苦められ、恥

を興へられながら、それを堪忍した美談は誠に澤山ある。夫等は皆眞の勇者だ。大石良雄が仇を報する迄にはそれだけの堪忍をしたが。刻苦といふのは貧とか病とか、其他所有災に忍ぶ事で、克己とは己の缺點を己で矯正しようとして忍ぶ能はざる處を忍ぶやうな行をいふのだ。又普通忍耐といへば何事でも苦しい事に堪へ忍ぶをいひ、堪忍とは、人から恥辱損傷を興へられた時に、これを堪えるのを云ふ。これは俗にいふ短氣性急の反対である。其の他勇の各種を云ひ現はした種々の名目は、今茲に一々擧げる。

第十八章 武勇と文勇

唯青年が陥り易い誤の一つあるから、それを序に云つておかう。それは勇といふ事を少し違つた方面から見て、武勇と文勇とに分ける事だ。大體に勇氣といへば、武勇であるといふやうに誤解する傾が青年に多い。武勇も元より輕ん

すべきではない。古より精戈千足の號ある我國の國民たる者は治に居ても亂を忘れぬやうに特に氣をつくべきである。されど古より文武兼備を以て人間の理想とする通り、左にサーベル右にペン、これが、人間調和の姿であるが故に、どうしても武勇と並んで文勇を得無ければならぬ。日本武尊や神功皇后申すも畏し坂上田村麿、八幡太郎、巴御前、牛若丸、木下藤吉郎、加藤清正等は、皆武勇の模範として、威名赫々たるものだ。かれ等の武勇は實に我國の光明であつて、この光明によつて我が國の我が國民には歴史は輝いてゐる。然れども一方我が國民には文勇が昔も今も缺けて居るやうに見ゆるのは残念である。文勇といふのは、名前が不熟であるが、要するに戦争の場處に於てせざる勇氣である。學問上實驗上の勇氣、探検上發明上の勇氣、營業上航海上の勇氣といふやうなものである。武勇文勇元來一つであつて唯表れ出づる有様が異なるのみで武勇に於て光榮ある歴史を有して居るものは又直ちに文勇の方に於ても顯著た

るべき見込は十分ある。が武勇を文勇の方へも向けるといふには又夫れ相應に練習の苦心と日月とを要するもので、却々一朝一夕にはゆかぬ。いくら陸戦に強い兵士でも、之れを海上の船戦に用ふれば定めて手も足も出ない様な恥を見るべきが如くである、さしも強かりし豊太閤の兵でも、朝鮮を伐つに當つて、陸上ではどん／＼と八道を蹂躙して居ながら、海上にあつては一も手を出す事が出来なかつた様なものだ。心は矢竹に速ることも、水に慣れない兵なれば終に如何ともすべからざるが故である。總ての勇氣が先其様に、夫々異つた勇氣を發揮し様と思ふと、夫々の方面に向つて十分の注意と練習とを要するのである。我國民は武勇を以て世界に名高い。されど我等がこゝに一つ悲觀せざるを得ない事は、文勇に於て、我等は嘗て功勳赫赫たる祖先を有せざるのみならず、今日の國民も、亦此點に於ては頗る缺けて居る事である。亞米利加、亞非利加、大洋洲將北海南海を探検跋渉して、之を世界に紹介し落ちたる黄金の在處を知

らしたといふ様な人は嘗て我國に於ては無かつたのである。家を忘れ身をも忘れ、千辛萬苦の餘、終に坐して千里を走るといふ様な好便機關を發明したといふ様な人は嘗て我國には無かつたのである。これは實に遺憾千萬といはなければならぬ。武勇といふは畢竟するに變に處する上に於て發現するものである。極端にいへば人が互に殺し合ふ上に於て發現するものである。人が互に殺しあふ戦争といふ事は世の中全體の傾から云へばこれ亦必然ある可きもので、國と國とが澤山並んで居る以上は國民利福の自衛上戦争するが極めて必要なり。否戦争せざるべからざるやうな場合が澤山あるのであるから、古の賢者も「戰陣勇なきは孝に非るなり」と申されたるが如く、今も昔と同じく、一旦緩急ある時に義勇公に奉ずといふ覺悟は、萬人が皆心とすべく、合せて、平素より武勇を練るべき心掛十分なるべき所以であるけれども、さて一面より見れば誰れも好んで戦争するのではない。止むを得ない

處より然るので、理想として望む處を云へば、戦争も何もなく四海の人々相互に手を携へ、東西南北の國々相共に調和交際して、各平和に幸福繁榮するといふ事ではなければならぬ。然れば國民としても、唯非常なる場合に於ける勇氣に富みながら、平和の時世に於て、平和の方法を以て、四海の幸福を増進するといふ様な方面に勇氣が缺け居つたならば、非常の不幸といはなければならぬ。我國民の武勇は世界に類稀なる事、數度の戦争によつて、已に世界に證明せらる。我等臣民の歡喜何物か之に如かんや。されども、我等の平和に處すべき文勇果して武名に伴ふべきや否や、蓋し寒心の至りである。歐洲人が或は昔の鞞鞞人などの例を引き、今日の我國民をこれに比較し戦争に強ければ強き程後世畏るべし。黄色人種の禍患は寒心するに堪たりと呼號さる所以のものは、その源何れにあるか、畢竟戦には強いけれども、世界の幸福を増進するに與るべき力はない。人を殺す事は上手だが、人を生かし人を樂ます事などは思ひ

もよらぬと觀察して居るからである。あゝ思へば何たる遺憾の事ぞや、傷心の事ぞや、忠勇義烈なる我等の歴史と博愛仁義なる我等の熱情とを有しながら、世間から誤解せらる事夫れ斯くの如しである。残念なる事には非ずや。これ、そも如何なる理由によりて然るか。詮すれば、我國民が歴史上、世界の文明と萬衆の幸福とを増進せしむる上に貢献したる事が極めて少いからである。こゝらが歴史が物をいふので、八幡太郎と太閤とを有したる我國は一方に就て、山田長政、天竺徳兵衛、濱田彌兵衛、記文以上の人物を有しなかつたといふ事によりて、斯くの如き誤解を招くものである、ネルソンとウエリントンとの武名

の傍にはベイコンありニウトンありシエクスピアあり、モルトケ、ピスマルクの傍にはゲーテ、シルレルあり、ナポレオンの傍にはユーゴウあり、斯くの如くして彼等に文武相對して、兩々其義を成して居る。然るに反りて我を見れば、實に八幡太郎と豊太閤とは其傍輩を有して居らぬのである。此れは誠に我等の

今日の青年に望み後來の國民に文武兩勇完備の名を全うする事を求めたいと思ふ次第である。

第十九章 文勇の養成

偉大なる武勇が存在したりしに拘らず、文勇が出現せざりし所以を以て、野蠻なりとか未開なりとか、やゝともすれば、聞くも忌々しき汚名を加へらるゝのである。まことに、嘆かはしき事といはなければならぬ。此後に於ては、是非武勇と共に、文勳に於ても優に、世界を壓し、其功勳と偉芳とは世界の文明史上に燦然たる氣韻を止むる様になりたいたいものだ。否さうでなければならぬと思ふのである。斯くするには餘程奮發しなければならぬ。刻苦忍耐しなければならぬ。露國との戦争の爲めに、臥薪嘗膽するよりも、尙一層も二層も臥薪嘗膽しなければならぬ。今日の青年に深くこの望を屬したのである。男らし

い事と勇氣といふ事は、唯軍人に於てのみ存すといふやうな料見を一掃して貰ひたいと思ふのである。終に勇氣養成膽力修養とかいふ様な事に就いて一言しておこう。之れは、前に修養の處を總じて話した處と参照して貰ひたい。大體勇氣を練るといふ事を腕力養成と同一義に考へて居るものが、今日の青年中に甚だ多い。けれども、夫れは大變な過まりで、腕力は腕力、勇氣は勇氣で別ののである。柔道とか劍道などを學びて、腕力と身體の使ひこなしが出来れば夫れで、膽力が出来ると考へて居る人も多いが、甚だしいあやまりである。成程腕力が出来れば、人と組打ちをして角力を取る時には勝つ事が出来るであらう。夫れで、警察も不完全で、各人の財産生命が不安全極まる様な社會に住んで居るならば、それは中々に必要である。今日でも野蠻人の巢窟へでも行かんとする人などには、極めて必要なものであるけれども先文明社會に生活する人に於ては、さしあたり實用上昔の武術などいふものは、餘り必要では無

い。肝腎なのは其の武器に對せし時の心持を練る事が必要なのである。昔の封建時代の如き武士が相互に腕力を競争して居つた時代ですら識者は腕よりも氣心を、業よりも膽力をといふ様に成めた。用心深くするといふ事が、大膽な、るべき第一條件で「膽は大ならんを欲し心は小ならんを欲す。小心翼々は、大膽大勇の源なり」と説いた。諸葛孔明の細心ありてよく蜀朝の運命を保ち、張子房の思慮あつてよく漢朝畫策の功を收めたと説かれた。若し、唯腕力のみを以て比べなば、上杉景勝は必ずしも豊太閤に劣らず、加藤清正福島正則亦豊太閤に劣らず、飯田覺兵衛は加藤清正に劣らず。然るに景勝、清正正則が豊公の股となり覺兵衛が清正の家中となつて、終始汗馬の勞に服したる理由は、秀吉の胸中其大を仰げば計るべからず。其小を窺へば極むべからざるものありしによつてである。清正の覺兵衛に對する又猶如此しである。是に於てか諸子もよく、勇氣の本領を了解しなければならぬ。勇といふ事は、目をいからし肩胛を

張りて天下を横様にあるくやうな腕力の問題、容貌の有様如何の事ではない。心の問題である。精神の問題である。智とか情とかの働きが、心の作用精神の一部である。斯様に勇氣も亦精神の働である。元より勇氣を容貌にて、外に表はすが爲めには或は目或は耳或は口或は手足といふ様に、凡て夫れ等を一種の方面に使ふ様に、技術的の練習をするの必要が夥しいのである。けれども其技術といふ事それ自らが勇氣といふ事なり。技術が上手になれば勇氣が出來たと思ふて居れば、大變に違ふ。技術技藝の練習といふ事は、畢竟ある宜しい結果を得んが爲めに勇氣を發表すんとする方便に過ぎないのである。英雄偉人の傳記を讀みて、之を味ひ、或は壯烈勇敢の美觀を、巧妙に描寫したる詩歌音曲に心を清ましめ、己の心の汚濁を去るといふ事など、共に勇氣を養ふといふ點より見て、極めて必要な事である。一方では腕を鍛ひ體を練る事も是非力めなければならぬが、それ丈では佛を作つて魄が入らぬのであ

る。夫ど並べて、清く涼しく、壯く勇しき心地を養ふと云ふ事が極めて必要である。ごうも、我國の徳川時代に於て行はれたりし教育主義は、此點に於て、頗る狹隘に失した事と思ふ。學者は詩歌音曲を末藝視して、ひたすら理窟に流れ、武士は腕力に偏して例の腕白を獎勵したる傾がある。従つて、詩歌音曲共に士人の重く顧みる所とならず自然の勢、益墮落して、淫猥聞くに忍びざるが如きものに非ずんば、淺薄誦するに堪へざるが如きもの、比々皆然りである、この缺點は、今日に於ても、尙十分其痕跡を止めて居るのであつて、識者は深くこゝに寒必するのである。

第二十章 仁と愛

仁の字は从で、字の形からいつても、二人相扶け相待ちて行く道を示したものである。二人が相扶けあつて行くつなぎとなるものは何であるかといふと

所謂なきけといふもので、今日の言葉にていはい感情といふものである。或は慈悲とか、親切とか、愛撫とか様々の言葉が使はれて居るけれども、要するに一にしてすべ考ふることの出来るもので、廣くいへば愛するといふ一言を以てもすべる事が出来るものである。

併し、別けていふと仁といふのは、主に他人に對して之れを愛し、これに盡すことをいふものであつて人が有つて居る感情中での最も高い有難い物をいひ表はすのである。愛といふのは、仁といふよりも廣い意義に使はるゝ、他人のみならず、己を愛するなごいふ事もある。感情といは一層廣い意味で此の中には善い事の原因も籠つて居るが、又悪い事の因も此處にある。愛といふ言葉でも時には比較上悪い意味に用ゐらるゝ場合が屢々ある。例へば愛に溺れて義理を缺くの類の如きである。

そこで先づ、感情といふ事から、一寸話して見ようが、併し、元來此處に感

情の原因などを委しく説く必要はない。但しこれは、智慧の働らき意志の働
きと並べて、人の心が働く著しき一つの方面である。人もとより木石に非ず
と昔よりいはれた通り。誰も彼れも、皆、此の感情といふものを有ちて居る。
丁度、護謨人形が中に空気を一ぱい入られると元氣づいて飛ぶ様に、生きた人
間に生氣あらしむるものとは、實に此の感情である。其の中、感といふ文字は外
から来る刺戟に我が應ずる方の側の働きをいひ表し。情といふ方は、心の中に
存して居る働きにて内から外に向いて活動するといふ様な方面を表はして居る
此二つが分けて使はるゝ時はもとより然りであるが。併し内外の二は、元來一
つのもので分つべからざるものであるから、文字も感情といふて一つの意味を
表すものである。

感情を分ちて、普通には、自分の爲めを思ふのと、人の爲めを思ふとの二
つに分けて居る。そうして自分の爲めを思ふのは悪いので他人の爲めを思ふの

が善いと説かれて居る。併し是れは、一がいさういふ事は、出来ない。矢張
り自分を思ふのにも、悪いのもあれば善いものもある。唯愛といつても、自愛と
いひては賤しい様に説かれ他愛といへば善い様に説かれて居る。併し之れも同
じく兩方共に善いのもあれば、悪いものもある。

人間にして自分の爲めを思ふ感情が無ければ、自分が攝生する事もなく、勉
強する事もなく、修養する事も何にもなくなる。つまりは自分を自分ぞと思つ
て、仕事をする事が無くなるから、人間萬事が無意味で、人間の交際も成立た
ない、道徳といふもの全體が成り立たない。それは丁度極幼い兒童が自分とい
ふ事も、自分の物といふ事も、殆んど知らないと共に、他人といふ事も、他人
の爲めを思ふといふ事も、殆んど知らない人間以下の動物を見れば、夫れが、猶
一層明かだ、自分といふ考へが極めて瞬時であるらしいと共に、他の爲めを思
ふといふ様な考へは更に少い様であるのを見れば分る、そういふ點から考へて

見れば、自利自愛の情と他愛の情と、それが二つ相反對して居る譯のものでは無い、畢竟一つのもので他愛が自愛の根源でもなければ又自愛が他愛の根源でもない。自愛他愛といふ二つの方面が、全く相並び相待ちて發達するものであるから、自利心が十分に發達しなければ他愛心も、また十分に發達するものではない。

この自利心と他愛心とが、甘く調和すれば、其人の行は何時でも圓滿に行くので、夫れが何れかで不平均になると、不徳缺陷相踵いで生ずるのである。自利心自愛心が勝ち過ぐる時は、貪慾我慢となり、人を損つても、己の利益を計らうといふ風になる、この方面は誰も氣が付き易いから、多くいふの要はない。他愛心の方が悪くなる事は、誰も一寸は氣が付かない。併しこれとても同じ事で、加減を仕そこなふと、すぐに悪くなる。例へば、一人の友達を世話したいと思ふ計りに、他の友達への義理を缺くとか、親兄弟への義理を缺くとか

いふ様な類である。その友達を世話するといふ考へは、大變善いのであるけれども、餘り一方にそれが過ると矢張りそれが悪くなるのである、それは、何故かといふと、大凡、人間の力といふものは、定限のあるもので、その定限内に於て、適當に自他を處して行くべきものである。然るに、その釣合を失ふといふと、例へば、家の妻子に非常なる苦痛を與へながら人の世話をすることか、或は一方で人から借金をして非常なる迷惑を其人に懸けながらその金を返す事も出来ないのに、他の人に金を與へるとかいふ様なもので。或は人は是等の類、行を大變義侠だとか何とかいつて賞めるけれども、良く考へて見ればそれは餘り賞むべき事ではない。同一人が、同時に、一方では非常に悪い事をして居るといつてもよいので、差し引をすれば價は消えて了ふ位のものである。而して自愛心と他愛心との此二つの平均を破らすものは激情である。激情といふものは、移り易く消え易いが其の起り來るや、一時は非常の勢であつて、却

却止める事が出来ないものである、これに任せて置くと、時には、偶然に思ひの外ほかの善よい事も出来る代りに、悪い事にも屢々しばしば陥るのである。昔から多くの學者がくしやが感情かんじやうといふものを、悪あくの源みなもとの様に考へ、成るべく道理だうりに従したがひて、仕事をせよといふ様な風に説き聞かせたのは、この激情を抑へ様としたものである。一方から見ればどうしても感情がそんなに、悪あくの源みなもとであらうか。實際人と人とが交際して行く上に於て、之れを結び付ける中心となるものは感情である。道徳の實質じつしつといへば要するに多部分は感情であるやうに思はるゝ所が澤山ある。仁といひても、孝といひても、長上ちやうじやうに敬けいといひても、衆人しゆうじんに慈悲じひといひても、總てが情の問題である。情なき人間が、いくら、意志が強ければとて、智慧が明であればとて、光澤ある人間といはるべきや、然るを強て情を抑へ様とした譯は、その激情の支配する所となるを恐れたからである。短氣たんきなり性急せいせいなりとか、粗放そほうとか、不羈ふきとかいはるゝ様な色々の非難ひなんが表はるゝのは、皆これ激情に支配せらるゝからである。

第二十一章 感情の訓練

激情を抑ふる心得も大體、情に激し易いとか、情に動かされないといふのは、人々の生れ付き、或は然らずとも、餘程幼少よせうの時から境遇きやうぐうなどから出来上つた、殆んど第二の天性てんせいといひても、宜しいやうなもので、幼少よせうの時から、色々いろくと親兄弟おやあになどが氣を付けて、之れを矯め直す事を考へたならば、いざ知らず、大人になつて已に癖くせが十分に出来上つてから、之れを直すといふ事は中々六つかしい。それで丁度諸子位ちやうしよの年から考へて段々と之を抑へる様にして行つたらよからうと思ふ。情に激し易い癖くせを去るのには、どうするかといふと、先づどんな事に當つても腹はらの蟲むしを抑へるといふ事を練習するが良い。一時に情が激して來る時には丁度電氣ちやうでんきが起つた様に頭かしらにむらゝと起つて來るからこれが起つ

て来るや否や、丁度、電氣を他體へ導く様に、頭を冷やす様に、考へるが善い、自分の頭を冷やすには、先第一に直ちに、今熱を以て考へて居る事、其の事よりして、直ぐ他に考を移すといふ事である。譬へば今人が己れを誹つた己れに無禮を加へたと思ふと頭へ熱が上つて来て益々腹が立つ、腹が立つのが其度を高むると直ぐ何か此方からも手を下さうとする、そうして手を下さすや否や夫れが爲めに自分の徳を傷つけて了ふ、それに引き替へ、若し自分に人が無禮を加へたと思ふ時は、直ぐ自分で他の事を考へて了ふ、人が無禮なり無禮なりと思つて居ると、益々其の考が深くなつて、矢も楯もたまらなくなるから、ちよいと、人が無禮なりといふ様な事を考へ初めた時に、直ぐ考を傍へ轉じて了ふ様にすゝる、さやうな時に、第一に善い工夫は廣い野原へ出で、散歩するのである。そうすると色々の人、馬車、樹花などを見るに付けて、先の不愉快なる者は、自ら消え去つて了ふ、若し其の人に、音楽とか其他の定まつた樂があるならば、

心を夫に移してそれを樂しむといふ事である、或は又書物に興味を抱いて居る人であれば、書見するなど最よろしい。
初めはさういふ風に、器械的に不愉快なる妄念を頭から取り去る事を練習して居る時は、後には夫れが己れの定つた習慣となつて、自ら情を激せしむる様な妄念は起らぬ事となつて了ふ。
右に述べた處は邪道へ引き入らるゝ様な妄念が起つて来た時には、これを己が嗜好せる道の方へ引き入れて、それで紛らかして了ふといふ方法であるが、第二にいひたいのは一の妄念が起つて来た時には、直ちに器械的に夫と全く正反對なる考を呼び起して、その妄念を消して仕終ふ様にせよといふ事である。例へば人が無禮なりといふ様な考が起つて来た時には、直ちに、否自分が驕慢に非ずやと思ひかへすが如き類である、人が約束を守らぬこそ不愉快なれと思ふ事あれば、否、自分が彼に、約束せし事は、果して明瞭確實なりしやと思ふ

が如き類である。

この第二の方は、第一の方よりも困難である。併し此の方が出来上がれば第一の方よりも遙に健全なものである、第三の方法は何時でも自分をゼロと視るといふ事である。他人が己に對して無禮なりと考へた時には、何時でも自分の價値は固よりゼロなり自分は元來無爲無功なり、何の爲し得る所もなく、何等の長とすべき所もなし、左れば人の己れを侮るはむしろ當然なり、人の己を誹るはむしろ當然なりと思ふの類である。總じていへば己に、長所があり、得意とする點がありと思ふによりて色々の我慢も生ず。瘡我慢を張りて厄氣となるなどの類みなこれなり、己を己として人に相對するが故に人も厄氣となるなり、若し己がいつでも己を處すること零無であつたならば、人が何として、己に觸接する事ありとも、己は依然として元の儘であつて、何時も平穩なる事を得るのである。

右の第三に至つては最も六つかしいのであつて、かゝる修養は絶世の大人物に非んば殆ど成し遂げられない程のものである。更に第四の方法がある。夫れは自分を無窮大に處するといふ事である、前にいうた第三の方は、己れを無窮小に見やうと試みる事なるが、それに反對して、これは、無窮大に見るといふ事である、同じく前の例によつて、誰か々自分に無禮を加へたといふ様な考が起つたときには、燕雀何ぞ鴻鵬の志を知らんやといふやうな風に考へて了ふのである、一度羽ばたきをして飛べば、五百里といふやうな古人の所謂鵬といふ鳥のやうに自分を考へて終ふのである、大洋へは色々様々の流れが入り込むが、大洋は騒がす迫らず従容として總てを吸収して依然たるものである、見渡せば茫茫乎として限りも無い程、廣いが扱一方から見れば、總ての河が是に流れ込む様子は、丁度水の空くなき空虚へ流れ込むと同様である、さういふ調子に先方より己に接し來る刺戟に應當せず一向平氣に、すべてを受け容れるやうである

と、我と他との間に少しの衝突も不調和も起らない、いつも平穩無事に暮して行くことが出来るのである。

自小觀、自大觀、但し、この第三と第四とは全く正反對であるが、一面から見れば、事實上一致するのである。恰も數學上に於て、無窮小と無窮大とは似たものでしかかも相反したものに考へられて居るやうなもので、我を無窮小に視る所以は我を無窮大視する所以、我を無窮大視する所以は、我を無窮小視する所以である、かの、空氣といふものは、決して無窮のものといふ事はいはれぬ。がその大を以てすれば、大や殆んど計るべからず、其の小を以てすれば、小や殆んど計るべからざるもので、どんな小さな隙にでもこれの無い所はなく、どんな大きな處にもこれの無い處は無い、理學上空氣の無い處があるといつて説明せられても、吾々は殆んど、それを想像する事が出来ない、これ、實に吾人に近き萬物中に於て、無窮大と無窮小とを兼ねたるものに、最もよく例ふる

事が出来るだらうと思ふ、それでこそ、平素は有れども無きが如く、禽獸草木將た人類は、勝手氣儘に、其中に運動周旋して居るけれども、空氣は依然として知らざるもの、如く、一向平氣である、然れども、一旦機に乗じて鳴動するや、天柱も動き地維も緩がん計りの大活動を呈出するのである、人間の生活も亦尙此の如しで、小たり得ずんば、大たる能はず、要するところは、寧ろ小大の境を併せ呑んで、其以上に超越し、時に應じ機に臨みて大となり小となる事が、その自由であるといふやうに立ち至りたいものである。

第二十二章 激情に就いて

扱て繰返して、道徳上から情の働きを見て見ると、前にいつた通り、自愛心と他愛心との二つであるが、その二つともが、善の源ともなれば、惡の源ともなるは、前にいつた處によつて分つて居る、善の源となる方は、自然的自愛心

自然的他愛心ともいふべきもので、惡の源となる方は、不自然的自愛心不自然的他愛心といふべきものである。而してその自然的と不自然的とを分つ原因となるものは前にいつた激情である。

そこで、その激情といふものを、少し委しく考へて見ると、何れの情に於ても、それが十分の頂上に達した時は、いつも激情と名づくべきものになつて了ふ、平常の場合に於ては、一つの情が起つて居ても、矢張り、それに並んで臍ろに、他の情が伴つて居る、例へば子供の事を考ふると共に親の事が伴ひ親類の事を考へると共に、兄弟の事が思はれて居る、そこで彼と此との情が差引せられて、一つの方面に激しく向ふといふ事はない、處が、それが極端まで、進みて、誠に、一方へ集中したとなると、心の働きは、一點に集つても、最早外へは傍目もふらぬやうになつて了ふ、丁度、(十)と(一)との兩性の電氣が、いくらか、互に牽制して居る間は電氣の活動は花々しくはないが、一方が全く缺け

て、他方のみになると、非常なる勢で活動を初めると同じやうなものである。それで一方に集中した方面があれば、他力には全く缺如せる方面があるのである。其の集中したる方面より見て、之を激情と名づけたるものである、激といふ文字から見ると、流るゝ水が、石に當るやうな有様で、激しく動揺するやうな意義を有するにより、或は悲の場合とか、恐の場合とかには不似合のやうに思はるゝ恐も少くはない、成程怒る時と喜ぶ時とは激するやうに思はるゝが悲む時と恐るゝ時とは、全くそれと反對で、じつと沈んで動かないやうに考へらるゝ、けれども少し細かにその様子を考へて見れば、注意が、全く一方に集中せられ、少しも他方へ向ふ餘裕がなく、矢張り一種不安なる劇動を感じ、心臓の急搏これに伴ふといふ状態は、全く同様なる事が分る、唯智識上からいへば喜ぶ時と悲む時との如き、その喜ばれるもの、悲まれるものを比べて考へ見れば、それが全く相反對して居るによつて、悲と喜といへば、正反對のやうに思

はるゝが、實際感情といふ方面より見、それが極端に達した時を見れば、皆同様の状態で、所謂一心不乱で、無我無中で、自ら何を識れるかを知らず、自ら何と感せるかを知らず、自らこれを制することが出来ない、一種の劇烈なる盲目的の働きであるのである。已に盲目的であるによつて、前後左右の區別が無い、已にこの激情が起つて来たとするれば、最早これをとりとめる事が出来ない、否それが出来るとするも、容易の事ではない。それ故これが起らぬ前に、起つて来さうな様々の原因をとり除くことが肝腎である。淺野長矩は、一朝の怒に乗じて、吉良義央を傷け、家をも身をも妻をも臣下幾百人の總てをも、これを束ねて、溝壑中に投じて了つた。むらくと起りし稻妻のやうな怒りといふ一つの魔物に襲はれたのであるから、堪らない、我を忘れ處を忘れる位であるから、まして、國家眷族の事などに思ひ及ぶの暇あらんや、狂氣の如くになつて投げつけた刃の光が過ぎ去つた跡は、切腹の嚴命立地に下つて、既にとりかへず事

が出来なかつたのである。

此の如く長矩は、一旦の激情に驅られて、己一身のみならず、家國を失ひ臣下の多人數に迄迷惑をかけたのである。結果から見れば明かなる悪で、一點の許すべきところもなく、また、斗屑の小人物を相手として腹を立てた處が、洵に磔々乎たる小丈夫の模型であつて人物としても、尊重すべき處が少しもないが、世人が割合にこれに同情を寄するのは、大石内藏之助のやうなよい家來が出で、主人の名前迄をも揚げたのが一つの理由、相手の吉良といふ人物がいかに卑屈貪婪の人物であつたといふ事によつて、人々のこれに對する悪から反對に長矩に同情を表すといふ様になるのが一つの理由である。それで今さういふやうな他から結び付いて居る條件をとり除いて、長矩の短慮といふ事に就いて考へて見れば、洵に詰らぬといふことが直に分る。

併し、世間では、極端に集中した激情に對しては、案外同情を表する場合も

すくない。かゝる場合にはこれを至情とか熱情とか稱へて、或は賞讃する傾がある。或人は長矩の行すら寧ろ男らしきものとして賞するのである、或は悲喜極つて發したる行の如きいつでも多くの同情を以て迎へらるゝのである。是等は、一つには、その人をして悲喜するに至らしめたる原因が、餘程同情を寄すべきものがあるのと、又熱中したる情の性質として無我無中で真に自他一切を超越した、天真至質なる行を發する事が多いからである、子を愛し親を慕ふの極み、國を愛し君を尊ぶの至り、熱情迸發して神々しき行を爲し遂ぐるやうな事が多いからである。

元來、無我無中にする行は考へやうによつては、それが、已に一種の美である。假令それが、多くの人間に、迷惑を及ぼしても、自識あつて爲したる行の如く、多くの人の嫌惡を買はぬのである。が國家社會はこれが爲に計るべからざる禍害を被る事を注意せざるを得ない。自ら識らず自ら制する能はずして、無

我無中に爲す事なるが爲めに、それが家國に對して非常なる恩徳を施す事なることとあると同様にまた非常なる大禍を來たす事もある。されば、考へやうによりては、其の大禍も偶然の結果で必ずしも本人の意志よりして然りしに非ざる如く、其の恩徳もまた同様偶然の結果なることが度々である、已に偶然のまぐれあたりである以上大にそれを賞讃すべき理由はない。寧ろその偶々恩徳を施した所以のものは、同一事情の下に、禍害を醸すべき原因あるものとして大に寒心すべき理由があるのである。

世人よ、それ故に、極めて冷靜に人の爲せる行を觀察し、苟しくも激情の迸發を見れば危険としてこれを避けよ。而してどんな大事に處しても自らよく知りよく斷じ、冷然不動の態度を以て從容として是を處するの度量を養へよ。これ實に一個人としても、一家としても、社會としても、將た國家としても修養すべき一大方針である。

第二十三章 正々堂々の道

昔の言葉に、知者は感はず、勇者は恐れず、といふがある。誠よく、この熱情を矯むる事を戒めたもので、已に感うて了へば、前後不覺となり、恐れて了へば、前後をとり亂すやうになるが感はぬ、恐れぬが故に、心は常に平和の状態にあつて、健全な行動を爲すことが出来る。そこで、どういふ風にすれば、此の激情を抑へ能ふかといふに、どうも是は前にもいうた通り一旦起つて了へば、大水で堤の破れたやうなもので、中々とりとめる事が出来ない。そこで平素から朝な夕なにそれが起らぬ前に、起る源となりさうなものを取り除く事が大切だ。激情に驅らるゝの悪い事だといふ事を悟り切つて了ふことである。人間は、元來が社交的の動物であるから、社會一般の風俗習慣が直ぐ吾人に感染し、又昔の傳記實録物語小説等によつて、その理想と心情とは、大に變化せら

れる。所が今日の風潮を見ると、前にもいうた通り、熱情といふものを却つて賞讃し居る傾があり、また、昔物語等を見れば、益々これを尊重して、花しき主人公といふものは、常に、この激情に逸り易いやうな人物である場合が多い。彼の俠客の物語などは、随分、人を感化したものだが、夫等の主人公には殊に激情的の人物が多い、もとより物語の主人公として表はされて居る程の人物故、決して平々凡々の人物ではない、其のはやり氣が色々の彩合をなし、その傳記の美をなし、人の心を惹くやうに出来て居るのでその傳記には、模範とす可き點も決して少くはない。けれども又それと同時に正々堂々ならぬ權謀術數を逞うしたやうな所、理でも非でも構はず、己の意地を張り通したといふやうな處が甚だ多い、故に若し健全なる人が、その傳記を讀んで取捨折衷したならば、随分、良い感化を興ふる事も多いに違ひはないが、未だ、心の定らぬ青年が是を讀む時は、虎を描いて猫に類すといふよりも、尙一層悪い結

果を來たす事になる。我々の理想は飽く迄も正々堂々の君子人である以上は、斯る弊害の恐あるものは成るべく避け、正々堂々たる真英雄の傳記を讀む事が必要である。左様な君子人の傳記を平生から讀み慣れて居ると自ら人物の高下の度が判つて來て、生きた實際の人間を見判けるにつけても、非常に助けになる。文字を學ぶにも、初めは極く正確な楷書から入つて進み行けば、様々の文字の善惡優劣正邪が判然として分る様になるが如く書を學ぶものが、初めに正眞の美術品ともいふべき名畫に接して居る時は、更に眼を轉じて、他の畫を見る時に、其の筆勢の正邪其畫法の優劣などが瞭然として判別せらるゝのと同じやうなものである。文を作るにも劍を學ぶにも、其他如何様の事を學ぶにつけても、先づ初めは正々堂々たる型を學ぶことが極めて必要である。初めに奇態な偏した癖が作らるゝと終生それが拭ふ事が出来ない。而して後に其の習癖を更たため、正々堂々たる路の方へ移らうとしても、前の癖が妨害をして中々に

行かれない。其故まづ初めは、正々堂々として少しも曲らぬ型を作る可きで、正々堂々たる型が出来その基礎が出来た上に築きあげ其上で種々の妙所を發揮するを得るのが、眞の圓熟せるものである。その正々の路を知らず堂々の途を經ずして猥に豪傑ぶり英雄ぶり才子顔をなし勇者らしく義者らしくはた仁者らしく振舞ふのは恰かも、木に比ぶれば、曲りくねりし庭木の如く、體に比ぶれば、不治の不具者たる尙儂の類である、かゝる不具不全の者と高風優雅なるものとは最も嚴重にれこを區別しなければならぬ。所が初めに、何の辨へもない若い中から、奇狂過激に失したやうなものを喜び讀んで居ると、直ちに、不具不全の人物になつて了ふ恐れがある。實際今日世人一般の間に於て、人物の批評といふものは決して公平に行はるゝものではない、又一般多數の人に高風優雅といふやうな趣味が分るものではない。それ故不具を奇趣と誤解し、尙儂を雅人と頌する類が誠に多い、そこで、又世間に行はるゝ物語に於ても、同様な

る誤解に基いて、寧ろ卑陋にして醜劣な事を奇妙飄逸な行らしく吹聴する事が
少くない。それ故是等を読む時には非常な注意を拂はなければならぬ、奇人傳
とか、逸事集とかを読む時には、非常に注意しなければならぬ、常に曲りたる
形を見、亂れたる音をきくときは、それを正しと思ひ、自ら己の形も己の聲も
それに似通うて来る。此點は深く注意しなければならぬ。

第二に激情に逸る結果は如何なものかと考へて見る。これを古今の例に照し
て比較考査して見れば直ちに、其の損は益を補ふに足らない事が判る。唯に一
人の身の上のみについて云はずとも、それが、一家一國社會へ及ぼす結果につ
いて考へても、直ちに、その作成する禍が、其の福に及ばないのみならず、
その害が非常である事が分る、それが分れば、漸次その激情を災の源と見る
やうになり、自他共に是を戒める事となる、そこで第一の方は、正と邪とを感
別するやうになるまで修養するといふ事で、第二の方は正なるものには幸多く

伴ひ、邪なるものには災多く伴ふといふ事を了解するといふこととである。

第三は、前述の如く人間は社交的のもので、自ら他人を模倣し易く、殊に年
若き時程、甚しいもの故、奇矯の人の傍に居れば、知らぬ中に同じく奇矯とな
り、怒り易き人の傍に居れば自ら怒り易く、患ひ易き人の傍に居れば自ら何事に
も憂ひ易き様になる傾あるものなれば、幼き時より、その境遇と其周圍とに注
意する事が必要だ。第一の讀書の材料を撰ぶと同様に是は、又尙一層の深き注
意を用ゐざるべからざるものである。

其處で、こゝに擧げた三法と、前に、激情を抑ふる法として述べたものとを
比べて見れば、前のは寧ろ大人が自ら自身に自身の缺點を矯め直す仕方をいつ
たもので、こゝに擧げた三つのことは、寧ろ幼き時小供の時から、これを教育
し行くにつけて注意し行くべき次第を述べたものである。言ひ換ふれば、前者
は激情が起りしといふ咄嗟の際に之を消滅せしめんとする應急の注意で、後者

は、末長く長年月の間修養を積み、起るべき熱情の根を絶たんとする其方法について注意したものである。

第二十四章 感情の調節

併し吾人は感情は無用だ、總てそれは抑へ止めて了ふがよいといふのではな
い。要は、感情を道理によつて支配するといふにある。道理の上に感情を働か
さなければ、感情は、いつでも禍となるといふ事だ。例へば、雨は共に植物
にとつて必要なものだが、その度を過すと非常な災を來たす。感情がなければ
石佛のやうで人間らしい味がない。が、またたゞ感情にのみ任せて、働けば、
人も己も非常な禍に陥つて了ふ。世の中にはこの點について二つの全く相反
した考がある。又同一人に於ても、時によつて、相反した判断をする事が少
くない。

されば一方では人間の働きの中で感情程有難いものはない。人は感情的動物
であつてこれが無ければ人にして人ではない。純粹の感情から起る行ならば、
何事でも行ふ方がよいので、それが所謂天真爛漫といふものである、自ら起つ
て來る情を無理に矯めるといふのは、丁度無理に樹木を縛り付け、枝ぶりを妙
に曲げて、これを喜んで居るやうなものであるといふ考へ方もある。又他方で
は、情が起つて來ても成るべく是を抑へて行く笑ひ度くても笑ひを止め、悲し
くても、悲しさを止めて行くといふのがえらい人間である。同じく、人に敬禮す
るのでも、たゞ何の氣もなしに人の前に頭を下げたのでは別段に禮義を守つた
人であるとも云はれない。誠に人を敬ふといふのは、道理の上から、その人の
敬はねばならぬ理由を知り、而して衷心からあの人は敬ふべき人故敬はねばな
らぬと頭を下げる事だといふやうに説く、前の方に従ふ人であると、やゝとも
すると勝手氣儘なことを許すやうになり、人のために盡すといひても、甲の人

には、大なる迷惑をかけながら、乙の人にもみ盡して居るといふやうな偏頗に陥る恐れがあるし、後の方に従ふ人であると、動々ともすれば、薄情冷血といふ誹を受け、又四角四面で、少しも餘裕がないといふやうな風の人となる。又同じ人でもこの邊の判断が定らず時々反對の判断をなし、これを平氣に行ふことあるによつて、不信用を招く事が多い。

大體、情といふもの程、わけのわからぬものはない。いはゞ魔物ともいふべきものであるかとおもへば、萬生に生氣を與ふる、幸の神のやうなものである。和氣霽々として樂むべき春の光のやうな状があるかとおもへば、慘愴悽愴として、秋の風に比すべきやうなものもある。忽ちにして上り、忽ちにして下り、光るかで見れば暗く、浮くかとおもへば沈み、出沒變幻する、その跡や洵に端倪すべからず、倏忽流轉して、其間髪を容るべからざるものがある。されば、我ながら私の情を明に知る事能はず、況んや人のそれをや。げに我々が、自

ら評し或は人を評して其の感情の如何を語るのは颯々習々と吹き荒む戸外の音をきいて、この風、海より來れりや、はた山より來れりやなどといふやうなものだ。

少しく考へて見よ。我々は、果して情なるものを明に知れりや、否や。風に北風南風あり、はた強風颯風の別名ありといへど、唯我々しか名くるのみにて北南といふも、風其物の保てるものに非ずして、風が通り來る方位の名なるが如く、強し烈しといふも風その物の保てるものに非ずして、風に觸れたる草木の音と動き振りとを形容せるに過ぎざるが如く、我々が、悲しといひ、樂しといひ、はた嬉し喜ばしなどいへる、所謂感情なるものは、唯嬉しとおもへる物事の意識と、その物事に對して我々の心に何事か起りしといふ、その何事かといふ意識とに過ぎないのではないか、されば、感情は一種の振動なりとも、一種の運動なりとも、流動なりとも、波動なりとも、撞動なりともいふを得べき

であるか。いかなる振動にや、いかなる運動にや誰も答ふる事が出来ぬのである。自分の心に、それが起つた時に於ても、その起つて来て居る時には、何が何であるか判らぬのである。たい大雨の如く大風の如く、地震の如く雷鳴の如く、過ぎ去つて後ほつと追懐してあゝ今のは悲しかった、嬉しかったとかう意識するのである。されば、悲喜快苦と意識する、その意識は、何物か分らぬもの、陰影であつて分らぬもの、本性ではない。分らぬものは、遠く先へ駈り行つて了つた、その跡に残つた痕跡である。

感情が此の如きものであるとすれば、感情が悪いとか善いとかいふのは迷ひの極みである。何が何であるか、分らぬものを善いとか悪いとかいはれる譯はない。それで、善悪とか正邪とかいふやうな區別をつける段になると、總てこれは人の智慧がすることであると、考へなければならぬのである。世の中の人は、よく自愛心は災の源であるが、他愛心は萬喜の源であるといふやうな

事をいふ、されど、その自愛他愛といふやうな別は、たい、人の意識の上に於てのみあることで、何も感情が左様に二つに分れてあるのではない、二つ反對した働が、この人間に左様に並んであると思つて居るのが抑の迷であつて、本來は、たい唯一である、唯一の進歩、唯一の無限の運動があるのみである。その運動、その振動たるや、一人に於ては、呱呱の聲を上げた時より、咄々の聲によつて此世を辭する迄續いて居るのであり、社會に於ては、元始以來以後幾億年に至るまで、延長して居るものである、我々の意識は、斯く一連延長せるものを通観する能はず、姑らく、その一小部分のみを意識し得て、他の小部分と比較し、彼や此やと名目をつけるのである、濃淡と云へるが如き分量上の差分も、善悪といふが如き性質上の差別も、皆これによりて起るものである、併し若し、本來、感情に差別種様がありとすれば、恐らく、此分量上の差別と、性質上の差別との二つであらう。がそれは、同一のものが、時には彼の如

くにもなり、此の如くにもなるといふのであつて、本来別物があるのではない
更に、他の一種の名前の付け方は、その情の目的によりて起つて居る、自分
向ふのが自愛心で、他に向ふのが、他愛心であるといふやうなものである。け
れどもこれ亦畢竟目的といふ智識は自分の智識に過ぎないので、自己も他人も
自分の智識上のものに過ぎないといふ點に於て一に歸するし、又他方より見れ
ば、智識上感情の働く目的は無數にあるものであるから、唯に二つのみなら
ず、無數に分けることも出来る代りに、假令二つに分つといへども、其間の界
限は、甚だ不明瞭になるのである。

此くの如く感情といふものは、渾沌たるものであり、不明なるものである。
之を區別し、批評するといふのは、智識の問題である。そこで情を道徳上から
見て、善惡正邪と分けることも、もとより智識に従ふ問題である。情といふも
の本来は、一體にして無差別なりといはなければならぬ、これを正なり邪なり

などいふのは、智識の定規に合ふか合はぬのかの問題である、即ち合理的、
非合理的の異名である。

そこで、智識上どういふ定規を當てはめて、感情を測るかといふに、いつも、
偏せず、黨せず、中庸調和を得るをもつて標準として居る。然らば、その中庸
は何を標準として定めるかといふと、それは畢竟判らない、六かしい理窟は、
其の點につけて、随分云はれて居るが、それは實行上餘り効力はない、たい日
常萬事に携はり行く中に、自ら極端に陥らぬやう注意するといふ事である。か
く一口にいへば、甚だ容易の事のやうであるが、實地に之を行ふ段になると、中
々容易でない、實行上の標準に一つの綿のやうな明かな真直なものが得らるゝ
わけではない。中庸といふことに、一直線のやうな標準はつまり無いのだ。之は
唯極端に陥る勿れといふ事を裏面に云ひ表したのに過ぎない。極端に陥るとい
ふ事は、つまり前にいふた激情に左右せらるるといふ事で前にいふた通り若し激

情を除く事が出来さすれば、その極端に陥る弊はなくなるのだ。即ち中庸を得る事になるのである。

それで感情の中庸を得る第一の方法は、激情排除若しくは激情鎮靜の方法である、これは、前にいつた通りである、それに並ぶべき第二の方法がある、第二の法は感情を多方に向はしむるやうに養ひ行くといふ事だ。感情の發動が、極端に向ふのは、それが一方少數の目的にのみ對して起るからだ。例へば、金錢に對してのみ情が働く時は、次第にそれが強くなると共に、人のものを盗んでも欲しいやうになる、金錢といふものは生活上必要なるもの故相當にこれを大切に思ふ事は必要だか、これを愛するの極、盗みとらんと思ふに至つては、已に大罪に陥つたものである。或は盗みをせぬまでも吝嗇に陥る人は數多くある。是等は皆一に金錢のみを愛し過ぎるよりの禍である。さればとて、又全然金錢を顧みない、全く金錢に對する情が缺けた人といふものは妻子は愚か殆

ど己一人をも支ふる事が出来ない。全く世の中の厄介物である、其故あり過ぎてもいかす足らなくてもいかす、要するに極めて、程よくこの情を養はなければならぬのである、萬の情が總て、斯様で程のよい中庸を得たといふのは即ち善で、過不及といふのが即ち悪である。

そこで幼少の時から成るべく多方面に情味を養ふやうにするのが、大切だ自分を修養して行くにも、常に此の心懸けが無くてはならぬ。例へば金錢の情に並びて美術心のやうなものがあれば、甚しくなり易い金錢の慾も、爲に折衷せられて、其人は餘程奥床しく見ゆるやうになる。己の親子兄弟を愛するに並びて、廣く多くの人に對しても同情を有して居る時は、一家の利害を考へるのみならず、又世間の利害を考ふるといふ事になる。親子の愛とて兄弟の愛とてあればある程善いといふのではない。それと共に他人の愛無ければ駄目だ。寧ろ道徳上の罪人である。己は親兄弟の爲にといふ考でも、世間の人から見れば、

矢張り廣い意味の自分で、世間の事を考へるよりも、先づ親子兄弟の爲をと思ひて、そののみ隨一に心がけて居ると結局は己の一家のみを計つて、他家の事世間の事を一切顧みぬ事になつて了ふ。さればとて、又世間、世間といつて、その方のみに奔走して、いくら、自分で、仁者顔をすればとて、親子兄弟が、家に空腹を抱へて苦んで居るといふやうな有様で居るのは、又勿論褒むべき事ではない。

そこで此の感情の中備を得せしむるには、成るべく感情の働らく範圍を廣くするといふ事が大切だ。感情の振動力といふやうな、いひかふれば、一人としての感情の可能能力といふやうなものは、略定つて居るもので、多く増減の出来るものではない、たゞ、成るべく、それを多方面に擴げて働かすといふ事である。同じ分量のものを一つの方面に向けると強烈となるが、多方面に向ければ穏和になるのは當然の事だ。故にこゝに感情を修養すべき最大原則は何かと問

大凡厭きらひおもふ心を轉瞬の間も働かす勿れといふ事だ。云ひ換へれば何事にかけても好きであれ、好まぬ事だ。而して、之と並ぶべき他の大原則は何事にかけても嗜むなかれ、好き過ぎるなといふ事だ。この二つの原則はつまり、一つの事の表裏の二面に過ぎないから、一方を守る事が出来れば、他方は自ら守る事が出来る。而して、その二つの中、何れを主として見るべきかといへば、勿論第一が本である。實行上から云つても、嗜むといふ方を節制する事は、割合に容易いが、嫌いといふ事の無いやうになるのは、最も六かしい。此の原則は、丁度意志(勇)を養ふ原則として、出来ない、能はぬといふ事を一切に就いて云ふ勿れといふのと同じものである。

加之、一面から見れば、調和し、中備を得たる感情は所謂仁で、仁心といふものは、他面から見れば、決して己一人の所有心ではなくして社會全體の所有心である、社會の感情が自分に映じたものが、所謂自分の仁心となつて居るも

のである。それで、この點から云つても、所謂圓滿成就せる感情、所謂仁心を養はんには、總てに對しあらゆる人に對し、常住不斷の愛情を有して居なければならぬ、いつでも社會と自己とが融和して居なければならぬといふ事が分るのである。

されば、己一人を清うするといふやうな、所謂巖穴の士、獨善の君子は、決して賞めたものではない、夫れは一種の不具人偏人である。世の中が濁つて居れば、此れを清くせんと事を思ふのが人の道である。いかなる事があればとて全く人間界を捨て去るといふは、其の自身が、人間で無くなつたのと同様である。人間と生れ乍ら、人間で無くなるのは、一大罪惡といはなければならぬ。

第二十五章 社交に就いて

世が進むに伴れて、博愛といふ事が尊ばれ、社交といふ事が、大變に重んぜ

らるゝやうになつた。人間が開化しない頃程その交親する區域が狭い、その狭い範圍の中にあつては、非常に愛情が濃厚だが、その範圍以外の者に對して是を敵視するやうな傾がある。野蠻人が小部落で團結し、各々他の部落と喧嘩をすることを絶たず、所謂雞犬の聲相聞えて、人相知らずといふやうな有様は、今も野蠻人間に見らるゝ事實である。それが段々開けて、部落が廣くなると共に、他の部落との交親も漸次廣がり終には國家團體を作り、尙進みては、國家と國家とが親しく交際し、世界の人類が、人類同士として、親しく交るといふやうに進んで行くものである。然るに、今日の我國民について見るに、立派な處が多いに拘はらず、社交につけては、未だ餘程幼稚であると思ふ。博愛とか一視同仁とかいふやうな考も、未だ十分に進んで居るとは云はれぬ。どうしても大名武士ありて、各藩相對峙して暮して居た間は、何でも、甲藩中の人と、乙藩中の人と、出逢つても、睨み合ふといふやうな風があつたものであるから、

その風が今日の聖代となつても、尙幾分か影を止めて居ると見える、此點は一日も早く除去したいと思ふ。

その博愛同情心に進めるには、寺院とか、學校とかの感化の與つて力あるは勿論であるが、赤十字社のやうな博愛的組織が感化することも極めて多い。この博愛心と社交との二つは相待ちて進むものである。而して社交といふ事は、全く人々の感情問題であつて厭な時にも厭といふやうな顔を見せず、いつでも、己に對する總ての人に不快の感を與へぬやうに、彼等を快く思はせようと心懸くる事が即ち社交の中心である。人と楽しく交際するといふ心懸は、幼少の時から養はなければならぬ、西洋の子供と我國の子供とについて見るに、此點の發達が非常に違ふといふ事だ。ちよつと、親共の留守に客人があつても、これに應接する事が、西洋の子供は、餘程上手で、様々の書とか、寫真とかを出して、客を樂ましめるといふ事に心懸けるといふ事である。

人格といふ事は、唯の一人で備はるものではない、他人と共立する時に於て備はるものである、世の人は、なに、人の御機嫌などは別段に伺はなくつても宜い、自分に獨立が出来、あらゆる才能智識が具はれば夫れで十分だといふが、それは世間見ず、人間見ずの僻見で、此の人間といふものが全く孤立しては何の意味もなくなつて了ふといふ事を了會せぬよりの誤解である、人間は社交的動物である、然る以上は、他人と對した瞬間に於ける、自己の人格は果して如何様に現はるものによ、是れ最注意すべきものである。他人に對せずして孤居せる場合にも勿論、己一人は己一人として一種の自識といふものがあるが、それが他人に對する時となる、夫れと共に、其の瞬間の自識は何となる一種別なものである、此の時の自識を圓滿完全にするといふ事が、實に人間らしき人間として、最も大切なものといはなければならぬ、自識を圓滿完全にするといふ事は、外でもない、自分が自分の上に就いて考へて、常に

愉快満足である、之ど又自分の心の中に、他人を考へて、其の他人も定めて愉快満足ならんとする事で、此自己中の自己満足と、自己中の他人満足との二つが一つになつて、いつも心中に表現せる時は、此れ即ち、其人は、社交的人格を成就し得たものである。

社會の一員をなして居る人は須らく自己満足と他人満足とを心中に表現し得て所謂社交的人格を完全に成就すべく、出來得るだけ修養を積んで行かねばならぬ。自己満足他人満足といふのは要するに自利々他の調和、自愛他の鹽梅に過ぎないのである。人として最も尊重すべき人格的品性を保つ上に於ては、他人の心身を己の心身中に置かねばならぬ。

そこで人間が社交的になるといふ事は、ともすれば誤解を招き易い傾きがあるもので、一見巧言令色して他人に阿諛するかの様に聞えるが、決してさういふ譯ではない。社交心と阿諛とはかの節儉と吝嗇と言つたやうな關係を持つて

居て、殆んどその如く雪と墨との差があるから、この範圍を嚴重に區別しなければならぬ。阿諛といふ事は讀んで字の如く阿諛阿諛ので、孔子も巧言令色鮮仁矣と嗟嘆せられて蛇蝎の如く之を憎まれたが、是れ即ち阿諛の事なので、己を利益せんがために心にもなき虚偽を外面に表はすことである。言ひ換ゆれば自利といふ卑しむべき目的を達せんが爲めに、君子も尚ほ陥り易き陥穽を構へて、欺いて彼れを引き落さうとする手段である。されば彼の人に愉快と満足とを與へんとするより外、秋毫も何等の求むる所なく、唯だ人の爲めに己を處するといふ真正なる社交心とは天地雲泥の相違あるものである。

第二十六章 智と徳

前には大略意志の事と、情の事を述べたが、其の二つが、道徳上賞讃すべきもので即ち仁とか、勇とかいふやうなものたるには、是非智とか其中に籠ら

なければならぬ。元來人間の間に、上下尊卑の分ちを爲す處、最大の源は、智である。有智の人が意志すれば、大勇となり、善意となり、有智の情が、高尚なる感情となるのである。學問上からいへば、元來此の點に於ては、議論紛々たるもので、智を主視する人と、客視する人があるが、夫れは扱て措き、先づ普通の意義に於ては、有智の意志、有智の情、此即ち勇たり仁たる所以で、いくら意志が強固たりとも、感情が熾盛なりとも、智にして其の中に含まるゝ事なくんば、眞の蠻勇劣情に過ぎぬといはねばならぬ。見給へ、野蠻人にも意志はあり情はある。それが到底野蠻人たるに止まるのは、智が無からである。文明野蠻の差は何によりて生ずるかといへば、皆智の多少によるのである。身體の方からいへば、文明人或は却つて劣れるかも知るべからずである。げに有徳不徳を分つ最大の原因は智だとソクラテスの言葉は、今も同様に眞實なりと云ふべく、我等に福を告げ、災を警むるものは智なれば、實に智は我等が道行

く先を照せる燈明ともいへやう。されば、人間が生れてから修業する大部分は皆智識を擴めんが爲であつて、多くの學校は皆是が爲に設けられ、多くの人は皆智を養ふが爲めに、約一生の半を費せりといつても宜しいのである。故に今茲に喋々として、智を研ぐの必要を説くの用は却て少いと思ふ。されば、ここでは、一言二言に止めておかうとおもふ。かく省略する所以は、固より智を輕視する所以に非ず、人の已に知悉せる所なるに依つてである。こゝに、一つの大きな疑問がある。智が増せば増すだけ、人はより多く善人たり得るかといふ問題である。智の有無が果して善惡を別つ標準であるかといふ疑問である。所が世間の實例に照して考ふるに、智者必ずしも善人ならず、質朴正直なる人、却つて無智の間に存在し、猾黠狡獪なる奴輩屢々有識の徒に多い、されば智識進みて人世必須の發明が出来ると共に、人世に最も危険なる害悪も行はれ、一方では、危険を防がんが爲めに良法の發明せらるゝと共に、他

方に於ては又その防禦を冒す可き最悪方法も工夫せらるゝ模様が見える。實際心細い次第である。それでこそ、無智こそ上智と説きし人も多く、人間が賢くなつたといふ事は世の中が險しくなつたといふ事の別語だといつて罵倒する人もある。成程悪人に文明の利器を持たせた程危険な事はない、狂人に刀物を持たせた程恐る可き事はない。此の點より見れば智の多少が善惡の標準ともならず。智を増すといふ事が、善人となるといふ結果を生せぬのである。こゝに於てか、何が善惡の本で、何が眞偽の源であるかと云事が大に疑はしくなる。前に云つた通り、意志それ自らも、感情自身も、智識自身も、實際其人の善惡の標準とはならぬのである。然らば何が果して道徳を進歩せしむるか、道徳といふものは、果して進歩するものなりや否やといふ疑が起るのである。

この問題を決するには社會全體の智と一個人との智とを分つて考へて見なければならぬ。成程一人一人に付いて見れば、有智の人、必ず無智の人より道徳

的なりといふ事は出来ぬかも知らぬ。されど、有智の社會有智の團體は無智の社會よりも無智の團體よりも、常に有徳なりといふを得べく、尙詳言すれば、有智の團體内の個人は無智の團體内の個人よりも一層有徳なりといふとが出来、即ち、此意味に於て智の多少若くは開未開は、徳の有無の標準になるといふ事がいはるゝのである。その故、如何となれば、元來道徳といふものは個人のものではない。個人と社會と相待つて初めて出来て居るものである。否寧ろ團體の方が主となつて、個人の方が客となれるものである。社會全體の進退變遷によつて道徳律といふものは常に變るのである。道徳的といふ事と、社會的といふ事とを並べて見れば、極めて親しい關係が有る、否殆同義といつても宜しいのである。換言すれば道徳的個人が、最も社會に適合したとの義に過ぎないのである。社會は永久不斷なるに個人は常滅である。されば永久偉大の目的は、常に永久不斷なる社會に存在するものであつて、個人は畢竟するにその

社會の目的に順應するを以て、目的とせるに過ないものである。而して其の永久不斷の社會の目的は何ぞと問は、社會の發達完全に外ならぬのである。個人が、皆各己一人の完全を望めるその所以は、延いて社會全體の完全を望むわけである。此くの如くにして、永久不斷の社會には、自ら意志があり、感情があり、將又、智識がある、この社會の智識たるや、幾萬の年月に、幾萬の分子が集積沈澱したる結果である。此の沈澱集積したる智識に依つて、永久不斷の徑路を知り、將來に向つて進行し行くのである、其の進行せんとする努勉が、發して社會の意志となり、その努勉に伴ふ合適不合适的の趨勢が、即ち、社會の感情となるのである。

それで、一人一人に就いて見て観るも、智ある者必ずしも善しとはいひ悪いけれども、智ある社會と智なき社會、換言すれば、野蠻なる社會と、開明した世の中とに就いて比べで見ると、何れの文明人の道德も、何れの野蠻人の道德

よりは勝つて居る事が明かである。よく世の中は學問進みて、人の心は益々險しとか、田舎の無教育なる人間は質朴でよいとかいふ。或は又多くの高識卓見者でありし人も、世を厭ひて澆季を歎せし人も多數にある。夫れは成る程見やうによつて、悪い方のみから見れば、左様に悪く見らるゝ事もあるであらうが、自分はどう考へて見ても、臺灣土蕃の様な生活が、今日我々の生活よりも勝つて居る。楽しい善いものであるとは考へられぬ。足の裏の皮の強い事、山阪を駆け巡る事などは、素より我々よりは十層倍も上手であらうが、夫れで我々よりも善い、強い人間だと考ふる事は出来ぬ。どう考へても、總てが文明人の方が野蠻人よりも進歩して居るので、又一層楽しい生活をして居るものであると信じなければならぬ。否百人が九十九人迄は皆斯く信じて居るのである。田舎には悪い事をする人間があつてもやり方が小さい。都會のやうな大悪人は無いといふ人もあれど、それは、田舎には大悪事の目的物となるやうなものがないか

らなので、更に又、都會で大悪事をする人間に就いて考へて見れば、田舎生れの無教育者が多きを占めて居るのを見ても、所謂田舎育ちとか、無智識といふ事が善人たらしめるといふ證據は少しも上らない。

又都會の人が田舎へ行つて、一寸質朴に見えるのは、服装言語など總てが違ふから左様考へらるゝので、十分よく諒解して見ると、中々陰險な處の特質を有して居るものも澤山ある。或は田舎人は、都會人の様子を熟知せぬ爲めに手を出さず、質朴を粧ひ居れども、田舎人同士の間では非常な曲事を働く場合も澤山ある。

無教育無智識の結果は、萬事が右様なもので、總ての災の源である。夫故智識は實に人生幸福の源で、萬人は、皆之れを研く事を本務とせねばならぬ。それが、人々各々の幸となるのみならず、又實に人生全體の幸福を作るのである。假令學問を勵みしが爲めに、又智識を磨きしが爲めに、其人は病に倒れしとか

思はぬ災に遭つたとか、様々の禍に逢つて、後から考へて見れば、其の人の不幸は、全く學問をしたが爲で、學問といふ事が、其の人を誤らしめた様に見えるても、尙社會といふ眼光から見たならば、其の人は社會に對して正當なる義務を盡したので、社會全體の開智といふ、運動に幾分參與したといふ事は最も好ましき事といはねばならぬ。即ち人は自分の利益の爲めに、はた幸福の爲めに學問の必要があり、智識收養の必用があるといふよりも、寧ろ社會の一員として、社會の進運を賛くべき義務あるものとして、夫が最も必要なる事といはなければならぬ。而して夫れが即ち其の人にも無上の幸福を與へるのである。

或は、黄金時代を過去に想像し、現在及未來の墮落を想像し其大原因を智識に歸して居る學者も哲人も大徳も澤山ある。老莊が儒者の智者振るのを嫌ひ、その所謂人智を罵倒したのは著明なる事で、バイブルにも、亦所謂智者を戒めた言葉は數多く見えて居る。實に此人の世を一睡の一夢に歸し、風前の孤燈に

比し、滄海の一滴に比して罵倒し去つた古賢の遺志は、今は尙昭々乎として大炬の如くであるが、古人がそれらを説かれし目的を、顯正の爲めに非ずして、破邪の爲めである、邪智邪道を破棄せんが爲めであつて智を排するといふ事が眞正の道なりといふ譯ではない。世人は眞智ならぬものを眞智なりと考へ、光明ならぬものを光明なりと考へて居るによつて、それが哀れさに、それ等をして眞智を得、眞實の光明に達せしめんが爲めに、先づ其の荆棘を開かんとして世人の有せる邪智を排すべしと説かれたものである。

第二十七章 邪智と眞智

然らば、茲に直ちに起る問題は、所謂邪智と眞智とは、何によつて區別すべきかといふ問題である。換言すれば正と邪との分ち如何といふ問題である。これは洵に大なる問題であつて、茲に一言を以てかれこれと取り極める事は、素

より出来ない。此事に就いては前に、修養といふ事について話した時には、一寸はなしたから、ひきあはせて見るがよい。要するに茲に云ひたいのは、正と邪といふ事は口頭の議論で定める事ではない、又己一人の料見で定める事でもない己一人が眞實なりと信じ切りたればとて必ずしも眞實ならぬ例は屢々ある要するに世運の向ふ所、社會全體の趨く所が即ち、一人一人を導くべき所で、個人の向ふ所が、世運の趨く所に合致せる所、此れ即ち眞實のある所である、個人が世運全體の趨勢に背馳した所、此即 偽の存する所である。世界の命社會の運は、實に其脈絡の續く處無窮である。無窮である間に自ら起伏もあり上下もある。是れを比ぶれば社會全體は尙茫洋たる大波浩濤に比すべく個人は其浩濤中の一波一瀾のやうなものである。従つて一波が全洋の運動に従はざる可からざるが如く、個人は社會全體の趨く方向に従つて行かなければならぬのである。其の大波浩濤の方向たるや、一波一瀾の能く知り得る所でないが、併

し、其の大洋全體たるや常に運行する所があるのである。それと同じく社會全體の運行する所や仲々一人一人の知盡し得る限ではないが、社會は一人一人が左右何れを向いて居るか一向其の様な事には頓着なく、駁々乎として進んで居るのである。其を進める先に無限の目的があらうけれども、是れ亦吾々に見つける譯のものではない、見つからないけれども、我々は常に其大波の中に含まれ、大波のまにまに揺られた居るものである。その大波の向ふ所が、則ち一切の眞實正路である、永久なる社會が、永久を標準として、永久に向つて進める所である、従て個人が進行し、活動すべき路も、又此處でなければならぬ云ひ振れば社會の進行する路が即ち一人行動の標準となるのである。されば所謂大波浩濤がいかなる濁流を交るも、矢張その大波たるを失はないのみならず、益々其大波の大を増すと同じく、世に生きとし生ける人、よし、それが悪と呼ばれたればとて、矢張社會の一分子をなせるのみならず、又社會全體の進運に合同し

て居るものである。若し其が社會全體としての趨向に戻らんか間髪を容れずして、忽ち没落するのである。されば今日吾人が此の世の人々に對し、或は世上萬事に對して善惡正邪といふ事を彼此いふのは全く比較上程度の差を分別したのに過ぎないのである。

此世の善と惡とは何も反對したものではない、世に正しと云はるゝ人と、邪なりといはるゝ人とは、何も反對したものではない、個人の側から見ると、其の個人が行動せる方向模様が、社會全體の進運に對して、如何なる關係を有して居るか、又甲の個人と乙の個人とを比べて甲が社會に對せる有様と、乙が社會に對せる有様と、そこに如何様なる差別あるかと思、個人の行動が、社會の進運に合致して居るらしきを善とし、之に反せるを惡とし、或は一層よく社會の進運に合致せるを善人、合致の度善人よりも、遙か下にあるが如きを惡人といつて居る迄である、大なる眼より見れば、如何なる善人にも足らざる所あり、

如何なる悪人にも、此世に生存せる限りは、社會に對して幾分の價値があるの
である。

正邪の別、善惡の辨、それ果してかくの如く解釋すべしとせば、それが智識
に對する關係は、固より多くいふを要せぬのである、即ち個人はあらん限り智
力を働かして、各種の事を知り、従つて己れ行くべき道を知るべしといふ事
である、各種の事を知るといふ中には、自ら自然界の法則と、社會上の法則
とを並べ知り、物質界の法則と精神界の法則とを並べ知るといふ事を含むので
ある、例へば、地震、雷の如きは自然界の事で又物質的の顯象である。政事上
の變動、外交上の事實等は、社會上の顯象、正直、誠實、忠義といふやうな
行、信仰、慈善といふやうな事實について、其の主動者、即ち正直なる人、信
心篤き人の心の中に表はれたる、哀感、慈悲、若くは正直、信實といふやうな
心狀は、正しく精神界の顯象である。所有る世界は總ふれば一つ、分ては無數

になるが、先づ大別すれば右様のものである、それ等の何れもの世界の法則を
知れば、自ら、そこに世間全體としての法則を明らかに想定せられる。之を以
て自己の行動の方針を定めて行くことが出来るのである、俗に人情を辨へざれば
人間は何事をするとも出来ない、酸いも甘いも知り分けた人物といふのが眞の
人間だといふが、その所謂人情といふ言葉が、精神界の顯象を云ひ表した者で
ある、之を知らなければならぬのは勿論の事、尙其他に物質界の事も知らなけ
れば屢々不覺をとり、心ならずも、邪曲に陥ることが多いのである。

第二十八章 天賦と努力

扱て、智といはるゝ中に、二つの見方がある、所謂識り得た智識と、物事を
知るといふ働とである、物事を知るといふ働きは、人々の性質に於て、優劣の
差が大分ある、所謂天賦の英才と、鈍才との相違である、鈍才とて、勤むれば

働きの進まぬ譯はない、又鈍才とて、勤めざれば退かぬ筈はない、畢竟するに同じ様に勤勉するとして、扱て能く物事の別る頭を英才といひ、物事の別りの遅いのを鈍才といふのである、此は天の爲せる區別であるから、人力の如何ともすべからざる事で致し方がない。併し世間に多くある例は、英才の失敗と鈍才の成功とである。斯く全く反對の結果になる例が多いのは、餘程著しい事であるから、一言茲に説明して置くのは、青年諸子の心得ともなる事であらうと思ふ。

何故英才が失敗するかといふと、少し許り早分りがするに就いて増長するからである。兎と龜と駈足競走を試みた處が、兎が油斷して眠つて居つた間に、龜が勝つたといふ話がある通りで、どうも小才が利くにつれて成功しない例が多い、その原因を擧ぐれば澤山あらうが、まあ著しいのを擧ぐれば、自分はあるから遣れば直ぐ出来る、人が一つする間に自分は二つも三つも出来る

思つて油斷するのが一つ、性來が小器用で、何を試みても一寸出来るによつて彼をして見たり此を仕て見たりして、一向に専心せず、轉々萍の如く甲轉乙走せるが故に、詰まる所、多くの兎を嗤つて居る獵師は、終に何れの兎をも射落す事が出来ぬやうに、何事も成就し切らぬ中、寄る年波に襲はるゝといふのが二つ、第三には小才がきくにつれ、人に愛せられ、人に重寶がらるゝ、それ許りならば尙よいが、左様な所からして、自然各種の誘惑物が多い事となり、終に一旦投じ終れば、再び上るとの出来ない色酒の淵にも落ち込む事になつて了ふ此が三つ。

之に反して、然迄才物ならぬ人でも、孜孜汲々、科に盈ちて進むといふ風に勤めて居るとついに大成の域に達する、昔より大器は晩成と云ひ、又急がば廻れといふやうな諺があるが如く、不斷の勤勉によつて終に成功するのである、されば精神一到何事不成といつて、銳意勉強を勧めた言葉と共に、英才頼む